
Model

南 晶

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Model

【Nコード】

N4511T

【作者名】

南 晶

【あらすじ】

冴えない俺の妹、桃子。

メガネで色白ポチャリ、おまけに男同士が絡み合うマンガが大好きな非モテ女子だ。

大学の美術部に在籍する彼女はある日、兄の俺にお願いをした。

「描かせて、お兄ちゃんの裸・・・。」

文字通り一肌脱ぐハメになった俺は、彼女の誰にも言えなかった心

。の闇を知る事になり・・・。

禁断の兄妹シリーズ第3弾です。

第1話（前書き）

禁断の兄妹シリーズ第3弾です。
お楽しみ頂けましたら幸いです。

第1話

2月14日、俺はフラれた。

俺が工業高校の時から付き合ってた女の子だった。

今更、どうでもいいけど名前は綾香。

名前だけでも、男ならグッとくる。

顔だって名前負けしてない本当にかわいい女の子だった。

俺なんかが相手じゃ、最初から勿体無かったのかも。

高嶺の花ってヤツだ。

バレンタインデイのその日、俺は彼女に呼び出されていた。

当然、チョコレートを渡す為だって思うだろう。

最近、俺の仕事が忙しくて会ってなかったから寂しがらせてたし、埋め合わせしようって俺は朝からムチャクチャ気合入ってた。

彼女に会うのが楽しみで、つまらない自動車部品の組み立てラインもその日は心なしに早く流れていく気がした。

このラインも高卒で入った俺はもう5年目になる。

板金を素早く摺んだり、持ち上げたりするのはもうベテランの域だ。俺がこのラインで車の部品を加工組み立てしている間、2年年下の彼女は大学3年生になっていた。

高卒でラインの部品の一部のように単純作業を繰り返してきた俺と、大学のキャンパスライフを謳歌してきた彼女との間には、当然のように溝が出来始めていた。

その溝は月日を経つにつれ深くなっていたんだけど、気付かないフリする以外に俺にできることはなかった。

「会って話したいの。14日会える？」

改めて連絡があつたあの日に、俺は気がつけば良かったのかもしれない。

だけど、2月14日という特別な日に指定されたことで、俺の勘は別の方向に働いてしまった。

定時のチャイムが工場内に響くと、5分前から板金を流さずスタンバってた俺はダッシュでタイムカードに向つた。

何があつてもこれだけは忘れちゃいけない。

俺が一日この工場で生産活動をしたという唯一の証だ。

オイルのついたままの群青色の作業着のまま、俺は約束の場所に車で到着した。

彼女が指定してきたその場所は、何故か大型ショッピングモール内の屋上駐車場だった。

夕方6時の屋上駐車場は、もう真っ暗で澄み切つた冬の空にはオリオン座が輝いている。

車から降りて、俺はタバコに火をつけた。

その時、ショッピングモールの入り口に見慣れたシルエットが現れた。

綾香だ。

「隆一君！待つた？」

彼女はふわふわカールした茶色の柔らかい髪を弾ませ、近づいてくる。

流行の細身のダウンジャケットにモコモコ毛の生えたブーツ。さりげなく肩にかけたバッグはブランド品だった。

会うたびに違う服を着てくる彼女の財源が俺には分からない。

高卒の俺は正社員とはいえ、ボーナス入れても贅沢できる身分ではなかった。

「俺も今来たところ。なんか久しぶりだな。」

俺は何となくどぎまぎしてタバコを靴で踏み消す。

彼女が近づくと、甘酸っぱいフルーツ系のコロンの香りが漂った。
反対に彼女は俺に近づき、顔をしかめた。

「ねー、オイル臭いんだけど。作業着のまま来たの？」

「あ、ゴメン。そのまま来た……。家帰ってないんだ。」

彼女はあーあ、と大きく溜息をつく。

「それじゃあ、中は入れないじゃない。スタバで話しようと思ったのに。」

「別に中入んなくてもいいじゃん？車出すよ。」

別にこのまま中入ったっていいだろう。

俺はあんまり外観に気を配る人間ではなかった。

問題があるとすれば、彼女が作業着の俺を連れて歩きたくないことだろう。

俺は何となく彼女の言わんとすることが分かった。

腰をかがめて、背の低い彼女の顔を覗き込む。

彼女は俺の視線から逃れるようにさっと顔を背けた。

勘がいい俺はそれで分かった。

俺が今日呼び出された意味。

「俺と別れたくなった？」

先に聞いてやると彼女は一応悲しそうな顔をした。

「ごめん。隆一君。」

「理由……。聞いてもいい？」

俺が意地悪な質問をしてやると彼女はぼろぼろ涙を流した。
泣きたいのは俺の方だろ？

「あ、あたしね、大学に入って、色んな人と会って、すごく世界が

広がったの。隆一君のことは大好き。でもね、あたしもっと大きな世界に飛び立ちたいのよ。」

目を潤ませ熱く語る彼女を俺はしらけた感じで見ていた。でも、この言い訳はうまいな。

誰の入れ知恵だか知らないけど、褒めてやってもいい。

「ふーん、まあ俺と一緒にいたら、この工業地帯から離れられなくなっちゃうからな。」

「ごめんなさい。隆一君のことは忘れないわ。」

目をキラキラさせて綾香は勝手に締めくくると、チョコレートらしきリボンのついた箱をブランドバッグから取り出した。

「これ、最後のバレンタインだから……。隆一君も頑張っただけ。」

何を？

俺は突っ込みたかったけど、黙って苦笑いした。

最後に彼女は俺に近づき、顔を寄せてきた。

背の高い俺の肩に彼女の手がかかった時、その顔を見下ろして俺は言った。

「やめとけよ。俺に触るとオイルで汚れるぞ。」

俺に言える精一杯の見栄っ張り、最後の矜持だ。

彼女ははつとした顔で、さっと手を引つ込めるともう一度ゴメン、と言った。

そのまま俺に背を向けるとさっき出てきた入り口に向って走り去っていった。

チクショー……。

暇になっちゃったな。

このまま家に帰るのだけは、いくら俺でもシヤクに触る。

その時、作業ズボンのポケットからケータイの着信音がした。誰だか知らないけど、すげえタイムリーじゃん？

一瞬俺は浮かれたが、発信元を見て再びガックリする。仕方がないから俺は着信ボタンを押した。

「あ、リュウ兄ちゃん？あ・た・し。桃子だよーん。」
だよーんて・・・。

特徴のある甲高いアニメ声・・・。
声の主は俺の妹、桃子だった。

第2話

俺の妹、藤井桃子は、今俺が立っているショッピングモールから車で30分ほどの所に下宿している。

この辺じゃまあ、ランクの高い国立教育大学の美術科の2年生だ。

長男の俺が不良で、何とか工業高校を卒業できるレベルだったのに対し、国立大学に進学した彼女は藤井家の期待の星だったと言ってもいい。

確かに小さい頃は、成績優秀な優等生だった。

そのデキのいい頭脳が、今となっては別の方向に暴走しているのを親はまだ知らない。

「リュウ兄ちゃん、今どこ？バレンタインだしチョコあげようと思つて。」

鼻にかかった甲高いアニメ声。

こういうのが好きな男も世の中にはいるだろう。

そうではない普通の男の俺には、ヤツの声は少し耳障りで、俺はケイタイを少し耳から離れた。

「今？お前んとこから遠くないとこ。チョコくれるんなら行くけど。」

「うわあ、来て来て。どこにいるの？」

何で聞きたがるかな・・・？

俺は少しうんざりする。

現状を説明するのが面倒で、俺は適当に返事をする。

「・・・どこだっていいだろ。それよりお前メシ食った？」

「うっん、まだまだ。なんか食べに行く？」

「出かけんの面倒くせえよ。下宿にいるんだろ？そこで待ってる。」

ハンバーガーでも買って行くから。」
「えー、今どこにいるの？マクド？」

だから聞きたがるなって・・・。

俺は一方的に電話を切ると、車に乗ってエンジンをかけた。

俺たちきょうだいの実家は、日本を代表する自動車メーカーの本拠地と隣接した工業地帯にある。

ここで生まれ育つと、何らかの形で車産業に関わる仕事に就いてしまう。

俺も例外なくそう育った。

桃子はその工業地帯から少し離れた大学に進学した。

実家から大学まで車で30分の距離だ。

だから全く下宿する必要はないのだが、美術の課題の締め切りが迫ると大学に泊まって来ることもザラにあつて、親は渋々学生寮に入る事を承諾した。

俺は時々、親から頼まれた届け物を渡しに桃子の部屋を訪ねるようになった。

不良の俺とは全く違う人種の彼女と口を利く様になったのは、実は最近だ。

ハンバーガー屋のドライブスルーでビッグマックセットを二人分買って、俺は妹の待つ下宿に向った。

畑と隣接した学生寮は、オンボロアパートという名が相応しい、レトロな建物だ。

俺は畑の農道に車をとめて彼女の部屋まで歩いていく。

木造の昔の小学校みたいな造りの建物だ。

女子専用な筈なのに、いつもこの建物の中で学生風の男どもに会う。

まさか、こいつらも姉妹に会いに来てる訳じゃないだろう。
多分俺もそうは思われてないだろうから、まあお互い我関せずとい
ったところだ。

階段を登る足音がしたのか、桃子はドアを開けて俺の到着を待つて
いた。

「いらつしゃい、リュウ兄ちゃん。」

手をひらひら振って、彼女はニンマリ笑う。

俺はその姿を見て思わず苦笑いする。

自分の妹ながら、その容姿を何と表現すべきか・・・。

まず、小さくて太っている。

運動できなくて外に出ないから、激白い顔。

羽二重餅みたいな顔に分厚い赤いフレームの眼鏡。

長い黒髪はセンターで二つに分けて両方の耳の後ろで縛っている。

まるで教科書に出てきた弥生時代の人みたいだ。

何故かスポーティーなラインの入った紺色のジャージを上下で着て
いる。

まあ、俺もオイルで汚れた群青色の作業着だし、ファッションにつ
いては人のこと言えないけど。

少なくともさつき俺をつった綾香と同じ女とは思えない。

彼女に招かれて俺は部屋に入った。

が、汚くて、足の踏み場が無い。

美大生らしいキャンバスやスケッチブックが重ねて部屋の隅に置いて
ある。

それはいいでしょう。

実家から持ってきたカラーボックスには、本や、雑誌、マンガ、教

科書なんかがバラバラに突っ込んである。

それらの本が棚に置いてある意味が無いほど、床には更に本がばら撒かれている。

ベッドには布団に匹敵する、洗濯物の山。

極めつけが、壁に架かっている青いロングヘアのウィッグにパールホワイトの宇宙服みたいなレオタード

これってコスプレってヤツか・・・？

「おい、何だよこれ？」

挨拶もそこそこに俺はその衣装が気になって聞いた。

まさか着るんじゃないだろうな？

俺が興味を持ったのを、彼女は嬉しそうに笑って答える。

「ボカ口のミクちゃん。」

「・・・誰だつて？」

聞いたこともない人だ。

歌手か？

怪訝な顔をした俺に、桃子は説明するのを諦めた。

床に散らばった雑誌を手で掻き分けると、そこに座布団を敷いて俺に勧める。

「まあ、いいからいいから。リュウ兄ちゃん元気だった？チョコ貰えた？」

嫌なこと言いやがつて・・・。

俺はさっきの出来事を思い出して舌打ちした。

「・・・大きなお世話だ。お前こそ他にチョコやる男はいないのか？」

彼女は丸い顔に笑窪を作ってコロコロ笑った。

「あ・た・し・は、三次元の男性には興味ないんです。」

「・・・ああ、そう。」

お前に興味がある三次元の男もあんまりいないだろうけど。

俺はなんか脱力して、足元に散らばった雑誌を手を取った。

少年ジャンプくらい置いてないのか。

手に取った雑誌は少女漫画・・・と思いきや目がキラキラした男同士が絡み合ってる・・・なんだこれは？

「あ、これえ？あたしの愛読書。BL系なんだけど、リュウ兄ちゃん好きかなあ？」

「俺が好きかって？・・・んなわけねえだろ！」

俺はおぞましくて、雑誌を床に投げ捨てた。

何で、俺がここでホモ少女漫画読まなくちゃなんないんだ？

桃子は気にする風もなく俺が持ってきたハンバーガーの袋をガサガサさばくりだした。

「あ、ビッグマックだ。ありがと！丁度お腹減ってたところなんだ。」

ハンバーガーの袋を見つけて、彼女は幸せそうに食べ始めた。

その姿は大きな白いハムスターみたいだ。

無邪気なその顔を見てるうちに、俺はなんか苛ついてたのがバカバカしくなってきた。

ポケットからタバコを取り出して火をつける。

「リュウ兄ちゃん、食べないの？」

モグモグ口を動かしながら、桃子は灰皿を勧める。

「お前の顔見てから食べるよ。面白いから。」

そう、こいつは面白いんだ。

俺の妹、桃子は自他共に認める非モテ腐女子だった。

第3話

俺はハンバーガーと油っぽいポテトで胃を膨らませてから、改めて桃子の部屋を見回した。

汚いのはこいつのせいだが、まず古い部屋だ。

この寮に入っていた学生達の伝統さえ感じさせる。

6畳一間のワンルームには和式のトイレはついてるけど、風呂がない。

共同のシャワールームが1階にあるそうだ。

小さな電気ストーブだけが、この部屋の暖房設備だが、その周りにも本が散乱していて危ない事この上ない。

お世辞にも快適とは言いがたいこの部屋で、彼女は本当に幸せそうだった。

「ここにはあたしの「好き」の全てがあるから。」

いつか、こいつが言った事があったが、何となく分かる気はする。

彼女にとって快適さとか、外観とかは問題ではない。

自分の趣味に没頭できることが、こいつの最大の幸せなのだ。

ただ、その趣味が常人の俺には理解できなかったんだけど。

ぼんやりタバコを吸ってる俺の前に桃子はインスタントコーヒーと、皿に載ったチョコレートケーキを持ってきた。

ほっぺにさっきのハンバーガーのケチャップがついたまま、にんまり笑って言った。

「では誰にもチョコ貰えなかったリュウ兄ちゃんに、カンパイ！」

俺はタバコの煙を飲み込んで、ゲホゲホとむせ返った。

お前だって非モテのくせに何だと？

「どうしたの？リュウ兄ちゃん？」

桃子は自分の分のケーキに手をつけながら、俺を見てニコニコ笑う。俺は上目でその丸い顔を睨みつけた。

「・・・るっせえ。殺されたいか？」

「えー！なんで？やだよお。」

そう言いながらも目は俺を見ていない。

既にケーキを食うのに夢中になっている。

それは、俺にくれるケーキじゃないのかよ・・・？

突っ込みたかったけど、もうどうでもいい。

恐ろしくマイペースな女なんだ。

俺が、全く人種が違う妹の所に顔を出すようになったのは、こいつの性格が心地よかったからかもしれない。

自覚はあるが、俺は顔に表情が無いし、喋るのが苦手だ。

仕事だって肉体労働で、社交性とは程遠い性格をしている。

ビジュアル的にも大柄で、一緒にいる人間に威圧感を与えるらしい。

「怖そう」

綾香にも何度も言われた。

だからって、人は簡単に変わる事はできない。

俺だって好きでこんなになった訳じゃない。

ところがこの妹だけは俺の全てのマイナス要因が通じなかった。

俺が喋ろっが、怒ってようが、黙ってようが、こいつは気にしないんだ。

ただ、自分が話したい事のみ一方的に話して、後は満足している。俺が聞いてなくても、気にしないし。

血の繋がった兄だからできる、遠慮のなさかもしれない。

・・・いや、そうでもないかな。

多分、こいつは誰といってもこんな女なんだろう。

ハムスターみたいな顔でモグモグ口を動かしながら、桃子は喋り出した。

「あたしねえ、今、創作に取り組んでるの。」

「ああ、いいんじゃない？美大生だし。」

俺はコーヒーを口につけながら、さらっと聞き流す。

どうせ、俺の答えなんか聞かないんだから。

「それでも、あたしの作品は評価されてるのよ。ただ、選考は通っても最終までいくには足りないものがあるんだって。」

「へえ、そう。」

俺は芸術のことなんかさっぱりだから、言っても無駄なのに。

彼女は熱く語り始める。

「ギリギリの所で勝敗を決めるのは、やっぱり画力なんだよね。あたしにまだ足りないのは、リアリティのあるデッサン力よ。もうこれは訓練しかないの。ピカソみたいな天性のモノを持つてる人以外は、頑張るしかないのよ。」

「はあ、そういうモン？」

テキトーな返事をして俺はまたタバコを口に咥えた。

桃子は珍しく真面目な顔をして俺を見つめている。

「リュウ兄ちゃん・・・。」

怖いくらい目をギラつかせて、彼女は俺を見ている。

あ、なんかヤバイ。

完全に自分の世界に入っちゃった時の顔だ。

「な、何？」

「あたし、ミケランジェロみたいな自然の美しさを画風に取り入れたいのよ。あたしの新しい作風にしたいの。分かるかな？ダビデ像みたいな、リアリティある自然の美しさ。」

「ダビデ像？」

学のない俺でもそのくらいは知っている。

それは歴史の教科書に載ってた、あのヌードな人じゃないのか？

「桃子、落ち着けよ。何言ってるんだ、お前。」

「あたしに足りないのは、実物を見てないっていう経験の無さかなって思うの。」

彼女の視線は、すでに俺の全身を舐め回している。

俺は怖くなって、後ずさる。

その俺に、彼女はにじり寄って来た。

「お願いがあるの、リュウ兄ちゃん。見せて。」

「・・・何を・・・?」

完全にイっちゃってる目をぎらつかせて、桃子はニンマリ笑った。

「・・・裸。リュウ兄ちゃんの裸、描かせて欲しいの・・・。」

第4話

「嫌だ！断わる！誰がそんなことするか！」

俺はずるずると後ずさったまま、狭い部屋の壁に衝突した。

その俺を追いかけて、四つん這いで桃子は更ににじり寄ってくる。その姿は本当に巨大なハムスターだ。

「いいじゃない、減るもんじゃないし。かわいい妹が芸術の為にお願いしてるのよ。」

上目遣いでパチパチ瞬きしながら、桃子は高い声でシナを作る。

「それがかわいいと思うてんのか？だとしたらお前は病気だ。」

「失礼ね。リュウ兄ちゃんだってモデルになって入選したら、ダビデ像みたいに市役所とかに飾って貰えるかもよ。伝説になるじゃん。」

「自分の裸体の銅像が市役所に飾られて嬉しい訳ねえだろ！」

想像してみても俺はゾっとする。

パンツも履いてない銅像のモデルが俺だなんて、こいつの口が裂けても絶対に言わせない。

桃子は壁に追い詰められた俺に接近し、作業着に手をかけた。

ファスナーを摘んで、少しずつ下げていく。

俺はその白いむくむくした手首を掴んで、最後まで下げられるのを何とか阻止した。

二人で向き合ってハアハア息をしながら、しばし停止する。

「落ち着け、俺はまだ許可してない。」

「何で？」

「何でって、俺たちは兄妹だろ？そういうお願いは彼氏にしる。」
「そんなの、いないもん。」

桃子の迫ってくる力が初めて緩んだ。

ぶすつとして、彼女は横を向く。

俺はその隙に、急いでファスナーを首まで引っ張り上げる。
危ないところだった。

「ああ、そうか。三次元の男に興味なかったんだっけ？」

「そうよ。それに、男の子なんかキライだもん。」

それはハムスターが俺に見せた初めての女の子っぽい顔だった。
何はともかく、正氣に戻ったらしい。

俺はやっと立ち上がった。

「男嫌いなのに、よく男同士がセックスしてるマンガ読むね。」

「ほつといてよ。リュウ兄に芸術は解んないんだよ。」

呆れる俺に桃子はぶーたれて言った。

俺はフェイドアウトしようと、壁伝いにそっと入り口の方へ向った。
逃げるなら今のうちだ。

靴を履いてから、俺は座り込んでる桃子の背中に向って言った。

「ごめん！俺、芸術は分かんない。チヨコケーキご馳走様！」

桃子は返事もしないで肩を落としている。

首が下がると、丸い背中が更にまん丸だ。

必要以上に落胆している彼女が少し気になったが、俺はこれ以上、
この件に関りたくなくて学生寮を飛び出した。

第5話

俺の23歳のバレンタインデーは、こうして散々な目に遭って、終わった。

翌日から、またラインに向って車の板金にネジを打っていく仕事が始まった。

僅かな生きる気力だった綾香と別れてしまつて、趣味も友達も少ない俺は残業に明け暮れるしかなかった。

少ない給料でも、出かける先とツレがいないと結構貯まるもんだ。俺の会社は末日締め、翌5日払いで、つまり3月5日が次の給料日だ。

あの、バレンタインデーの日……。

俺はいつもマイペースな桃子のがつくり肩を落とした後姿が妙に気になってた。

他にすることがなかったから、余計思い出したのかもしれない。

ガラにもなく、俺は心配していた。

そういえば、男がキライとか言つてたしな。

何だかんだ言つても、ヤツは妹で幼い頃は泣きながら俺の後を付いてきてた。

いつから俺たちは喋らなくなつてたんだろう。

アイツが下宿し始めて、お互い口を聞き始めた時、俺たちは既に完全に違う人種だった。

給料出たら、メシでも誘つてやるかな。

俺は板金をラインに送りながら、ぼんやり考えてた。

そしてやってきた3月5日。

今日は残念だけど、2時間残業がある。

仕事が終わってから、俺はアイツに電話してみることにした。

工場内の駐車場においてある車に乗ってから、ケータイをかけてみる。

車の時計は7時を回っていた。

3月になったとは言え、外はまだ寒いし、風が強い。

少しだけ日が長くなったのが、春が近づいてるのを感じさせた。薄紫の夜空に三日月がぼんやり浮かんでいる。

「もつしもーし。リュウ兄？ひつさし振りイ！どーしたのお？」

俺が喋る前に、桃子のテンション高いアニメ声がキンキン響いてきた。

なんだ、元気そうじゃねえかよ。

心配して損した。

俺は舌打ちして、不機嫌そうに返事をする。

「何でもないけど、今日給料日だったから。この前のチョコレートケーキのお礼しようと思って。」

俺は食べてないけどな。

心の中で毒づきながら俺は言った。

「マジ？嬉しい！リュウ兄、どこにいるの？」

「まだ会社。車で15分でお前んとこ着くよ。行っっていいか？」

「えっ？後、15分？」

桃子の声が裏返った。

いつも暇なくせにおかしなヤツだ。

「なんで？都合悪いのか？」

「もうちょっと、後からでいいかな？今部屋汚いし。」

「・・・はあ？」

アレより汚い状態になることがあるのか、あの部屋は？
いつもはそんなこと気にもしないのに。

勘のいい俺は、彼女が何かを隠していることにすぐ気が付いた。
面白れーじゃん。

「分かった、１時間後くらいでいいか？」

「りょーかい、りょーかい！待ってまーす。」

桃子はホッとしたように、軽いノリで返事をする。携帯を切った。

いたずらを思いついた子供のように俺はワクワクして、ニヤリと笑った。

俺は車のエンジンをかけるとアクセルを踏み込んで、全速力でヤツの下宿に向って走り出した。

車をいつもの農道に路駐して、俺は学生寮のあいつの部屋を眺めた。
窓から明かりが見えて、いるのは確実だった。

すぐ行くと言った時のアイツの慌てっぷり。

さては男でも連れ込んでるな。

だとしたら相当な物好きだが、何となく俺はそう決め付けて彼女の部屋に向って歩き出した。

いつものレトロな玄関に入って、狭くて暗い急な階段を上がる。

上がってすぐの右側のドアが桃子の部屋だ。

そのドアからテンポの速いユーロビートみたいな音楽が洩れている。
俺はノックもせず、黙ってドアを開けた。

そこで俺が見たものを何と表現したらいいのか・・・。

俺が想像していた、連れ込まれた男はいなかった。

その代わりに先日のコスプレ衣装を身に纏って、狂ったように踊っている桃子がいた。

青いロングヘアのウィッグはまだいい。

白いレオタードの中に強引に押し込まれたボディは、まるでボンレスハムだ。

太い足が細いブーツに無理矢理押し込まれてて、折れそうな細いヒールが悲鳴を上げている。

まさかこれがボカロのミクちゃんじゃないだろうな？

桃子は俺が見てることに気付かず、完璧な振り付けで壁に向って踊っている。

壁には小さなデジカメが立てかけてあるのが見えて、俺はやっと理解した。

動画を撮ってるんだ。

ブログにでもアップするつもりか？

それは犯罪だろう。

唖然と見つめる俺に桃子はやっと気が付き、思い出したように悲鳴を上げた。

「やだああ！リュウ兄！いつから見てたのよ？」

「・・・ちよつと前から。」

桃子は慌てふためいてキヤーキヤー言いながら、部屋の中をバタバタ駆け回る。

その度に俺の足元が地震の如く振動した。

「今更隠れても、もう見ちゃったって。謝るよ。ごめん。」

俺は苦笑しながら部屋に入って言った。

桃子は引っ張り出した毛布に頭から包まって、俺を睨んだ。目が潤んで声が震えている。

「ひどいよ。誰にも見られなくなかったのに。リュウ兄ちゃんなんかキライだよお！」

そりゃ、そうだろうな。

その気持ちはよく分かる。

俺だってこんな姿誰かに見られたら、明日から生きていけない。ちよっと可哀相になって俺は毛布から半分出た青い髪の毛をなでた。

「ごめん。今日はおごるから。機嫌直せよ。」

「ヤダ！あたし、傷ついたんだから。」

毛布の中に潜って行く青い頭を俺は捕まえた。

こんな時、女って何て言って欲しいんだ？

俺は髪を掻きながら、自分の少ない経験を思い出す。

「桃子、その・・・似合ってたよ。かわいかった。」

乏しい表情の中からなるべく優しそうな顔を作って俺は言った。

普通の人ならそれがお世辞だと気付いて、俺が気を遣っているのも分かってくれる筈だ。

桃子はそれを聞くと、むくむくと毛布の中から出てきた。

顔だけ出してニンマリ笑うと、いつもの高いアニメ声で俺に言った。

「ありがとう。リュウ兄ちゃんもこういうの好き？」

ふてぶてしいにも程がある。

俺は出てきた彼女の頭を、もう一度毛布の中に押し込んだ。

第6話

あいつが着替えてる間、俺は車に戻ってタバコをふかしていた。いくら妹でも、本人の着替えてる所で待ってるのは失礼というものだ。

俺は無口で無表情だけど、デリカシーはある男のつもりだ。

だから、往々にして桃子のぶっとんだ行動が理解できないのだけど。

やがて、丸々した体にモコモコしたダウンジャケットを着た桃子が、車の窓ガラスを叩いた。

俺が助手席のドアを開けてやると、よっこらしょっと掛け声を掛けながら、桃子が入ってくる。

オバサンかよ……。

俺は横目でそれを眺めながら、タバコを消した。

「で、どこいく？今日はおごるけど。」

「うーん、じゃあね。せつかく車出してもらえるんだから本屋さんのあるとこ、連れてって欲しいな。」

「……本屋でメシ食えねえじゃん。」

「だから、両方あるとこ。あそこの大型ショッピングモールがいいな。レストラン街もあるし、大型書店が入ってるから。」

俺はハンドルに突っ伏した。

そこって、この前俺が別れたとこだろ……。

俺のリアクションの理由が分からない桃子はテンションの高いアニメ声で話し続ける。

「あそこにね、パスタが食べ放題のイタリアンレストランが入ってるんだよ。スタバもあるし。あたし、車がないからリュウ兄ちゃんに連れてって貰おうって、待ってたんだ。」

「ああ、そう。」

俺は髪を掻きながら、エンジンをかけた。
しょうがねえな。

さつき恥ずかしいもん見ちゃったお詫びもあるからな。
腹をくくって、俺はアクセルを踏み込んだ。

俺がフラれた懐かしい屋上駐車場に車を留めて、俺たちはあの日綾香が出て行った入り口からモール内に入った。

時間はもう8時になっていたが金曜日の夜だったせいか、まだまだ人は多かった。

俺はオイルで汚れた作業服のまま、ダウンジャケットを着た弥生人みたいな桃子と並んで、オシャレなブランド服エリアを闊歩した。
完全に異色なカップルだろうけど、こいつと一緒になら人目も気にならない。

どうでもいいからだ。

俺たちは恋人にも見えないだろうけど、兄妹にも見えないだろう。
痩せ型で180cmの俺に対して、桃子は150cmくらいでぱつと見ても60kgは、ありそうな体型だ。

反対じゃなくて本当に良かったと、俺は思う。

俺がのろのろ歩いている間、桃子は体に似合わぬ素早さであちこちの店に顔をつ突っ込んで物色していた。

やがて桃子オススメというパスタが食べ放題の店に入った。

オープンカフェみたいにテーブルが並んだ店の前には、明らかに恋人同士のカップルが会話を楽しんでいる。

オシャレな店だ。

綾香はきつとこんな店でもっと小綺麗な男とお話したかったんだろう。

俺みたいな口下手なヤツじゃなくて、女の子を笑わすのが上手い爽やかなヤツ。

最初から、俺たちはこうなる運命だったのかな。

少し感傷に浸ってた俺を全く気にすることなく、桃子は席に着くなり皿を掴んで、パスタを取りに行ってしまった。

「リュウ兄！早く取りに行こうよ。サラダバーも食べ放題だよ！」
テーブルに頬杖をついて座っている俺の前にパスタの皿がどんどん並んでいく。

こんなに食えるのか？

俺は恐ろしくなって、彼女の後を追いかけた。

食べている間中、桃子は自分の作品について自画自賛し続けた。

本人曰く、何度も最終選考まで残っているらしい。

俺はこいつの作品を見た事がなかったし、芸術にも興味がなかったので適当に相槌を打ちながらパスタを食べ続けた。

「でね、一番最後にエントリーした作品の結果がもうすぐ来るの。アレはイケルと思うんだよね。あたしこの作品の結果で将来のことも決めようと思ってるんだ。アーティストとしていくか、無難に教職でも取るか。」

熱く語る桃子を俺は少し羨ましく眺めていた。

こいつにはまだ未来がある。

何を作ってるのか知らないけど、自分の可能性を信じてチャレンジしている。

いい結果が出て欲しい。

素直にそう思った。

桃子は、できれば俺みたいにはなって欲しくない。

朝から晩まで日の差さない工場で機械みたいに働く俺みたいには。

ドングリを頬張ったハムスターのような顔でストローを咥えて、桃子は続ける。

「もし、入選したらあたし次はリュウ兄ちゃんをモデルにするよ。あたしね、名誉市民章もらったり、作品が市役所に飾られるような有名アーティストになりたいんだ。」

俺はその丸い顔を睨んで呻いた。

「・・・その話はやめろ。俺は脱がないからな。俺の銅像は市役所には置かせない。」

「もー、何でよ？リュウ兄、意外にシャイなんだね。」
コロコロとハムスターは声を上げて笑った。

ああ、脱ぐさ。

他の女の前ならな。

俺は、妹のお前の前で脱ぐのがイヤなんだよ！

俺は思ったが、もう黙ってた。

どうせ聞いてやしないんだから。

胃が痛くなるほど、パスタを食べた後、俺たちは桃子オススメの大型書店を歩き回った。

俺は本を読まないの、ちょこまか動き回る桃子の後をノロノロ付いて回った。

彼女が釘付けになるのはいつも、男同士がキスしてる表紙のマンガコーナーだ。

俺だってエロ本コーナーには恥ずかしくて行けないのに、桃子は悪びれもせずコーナーの真ん中で立ち読みを始める。

周りを見ると、何となく桃子と系統が似ている女の子達が一心不乱に立ち読みをしている。

彼女達より頭一つ分大きい俺は、コーナー内で異常に目立っていた。

何で、この人達は恥ずかしくないんだ？

俺はいたたまれなくなつて、桃子の背中を小突いた。

「おい、行くぞ。」

「うーん、もうちょつと。これだけ読んだら。」

桃子は俺を振り返りもせず、マンガを読んでいる。

何を読んでるのかと小さい桃子の頭の上から見下ろしてやると、そこには俺には理解しがたい世界が描かれていた。

完全にエロ本じゃねえか、これ・・・。

絵が美しいだけ、タチが悪い。

知らないヤツが見たら、少女漫画と間違えて買つちまうだろ。

ダウンジャケットのフードを引っ張って、俺は桃子をコーナーから引き擦り出した。

「なあ、お前つてさ。」

「なあに？」

桃子の寮に向う車の中で俺は口を開いた。

「何でああいうの好きなの？」

「BLのこと？」

そんな専門用語知らねえけど。

俺は少しだけ、こいつの頭の中を覗いてみたくなって聞いてみた。

「だって、男嫌いなんだろう？なんでそんなの興味有るわけ？」

「うーん、リュウ兄には分かんないと思うよ。」

そりゃそうだ。

分かんないから聞いてるんだよ。

俺は心の中で突っ込みを入れる。

桃子は少し考え込んだ。

黙つてると、賢そうな顔だ。

仮にも国立大学の美大生だから、実際、賢いんだろう。もう喋らなきゃいいのに。

「安心するのかも。」

「は？」

「そこに女の子がいらないことに安心して読めるの。」

俺は運転しながら、首を傾げる。

「・・・ごめん、意味分かんない。」

少し沈黙の後。

桃子は車の窓を見つめたまま、ぼそつと言った。

「あたし、男の子がキライなんじゃなくて、男の子が怖いので、多分。」

第7話

男が怖い？

桃子の回答は理解できなかったけど、その言葉が俺には引つかかった。

「何だよ、それ？どういう意味？」

「ねえ、それよりさあ。さっきのイタリアンおいしかったよねえ。また車で連れてつてよ、リュウ兄ちゃん。」

話を変えたがるように、桃子は明るい声でそう言った。

・・・話したくないってことか。

勘のいい俺はすぐに分かった。

だから今日のところは、これ以上追求するのをやめた。

農道に車をとめて、俺たちは桃子の学生寮に向って並んで歩いた。外はいつの間にか風が止んで、春の気配を感じる生暖かい空気が立ち込めていた。

湿気が多くて、明日は雨になりそうだ。

俺は桃子が部屋に入るとこまで見届けるつもりで、彼女の後をついて行く。

少し前を歩いていた桃子は、先に寮に着くと玄関に並んでいるメルボックスをガサガサさばくりだした。

出張エステだの、出会い系サイトだの、いかがわしいチラシが彼女のメルボックスから山のように出てくる。

その紙くずの中から桃子は小さな茶封筒を見つけて、立ち尽くした。

手紙を握った彼女の太い腕がガタガタ震えている。

「何？手紙か？」

俺は桃子の後ろから覗き込む。

「・・・これ、きつと結果発表の通知だ・・・。」

震える手で封筒を破りながら、彼女は言った。

さっき、結果次第で進路まで考えるっていったヤツか。

そう気付いたら、それを見ていた俺まで緊張してきた。

桃子は封筒から白い紙を取り出し、顔に近づけて広げた。

しばらく書面に目を走らせていたが、やがて呆けた顔で俺を見上げた。

「リュウ兄・・・。ダメだった。また落ちた。」

桃子の落胆振りは凄まじかった。

さっきまでパスタをほうばっていたハムスターのような顔が、突然萎んでしまったかのようなうた。

俺はどうしたらいいのかわからなくて、桃子が崩れ落ちていく様を傍観していた。

「まあ、また頑張ればいいじゃん？次もあるんだろ？」

取り合えず、無難な慰めの言葉を口にする。

桃子は恨めしそうに俺を見上げた。

「言ったでしょ？これで進路決めるって。4月から3年生になるから、進路によって取る授業を選択しなきゃならないんだよ。アートの道を究めるならその方向のゼミ取らないといけないし、教員試験を受けるなら一般教養の授業増やさないと。それをこの結果で決めようと思ってたの。」

桃子はそう言うと、はああ・・・と溜息をついた。

大学に行っていない俺にはそのシステムが分からなくて、桃子の言っ

たことの半分も理解できなかった。
が、彼女が自分の夢を諦めて、無難で堅実な道へ行こうとしている
ことだけは分かった。

頑張ったのに、報われなかったんだな。

少し、こいつが可哀相に思えた。

だが、それ以上に俺の中に湧いてきたのは、諦めて欲しくないとい
う思いだった。

こいつにはまだ未来があるんだ。

こんなことで諦めないで欲しい。

俺みたいになって欲しくない……。

俺は、メールボックスの前で手紙を握り締めたまましゃがみ込ん
でいる桃子の腕を掴んで、グイッと引つ張り上げた。

突然引つ張り上げられた桃子はよろめきながら立ち上がり、ビック
リした顔で俺を見る。

「何？リュウ兄ちゃん？」

「諦めんなよ。協力するから。」

「え？」

桃子は怪訝そうな顔をする。

俺はその腕を掴んだまま、部屋に続く階段をずんずん登って行った。

「な、なあに？リュウ兄ちゃん？」

「何度も言わすな。協力するって言ってんだよ。」

「何を？」

口にするのも憚られたその一言を俺は言い放った。

「俺の裸、描きたいんだろ？協力するから好きなだけ描け。だから・
・だから、まだ諦めるな。」

桃子の顔が一瞬パッと輝き、そして柔らかく綻んだ。

第8話

火の気のない部屋に、桃子は電気ストーブをつけた。

さつき動画を撮ってたお陰で、部屋の中は少しは片付いてる。

俺は変な緊張感を感じて部屋の中をウロウロしていた。

何だろう、この感じ……。

そうだ、思い出した。

初めてラブホに入った時の気まずい雰囲気だ……。

今夜の相手は巨大ハムスターだけど。

桃子はもう仕事モードに入っている。

落ち着きなく動物園の熊みたいにウロウロしている俺をよそに、イーゼルを組み立てスケッチブックを用意する。

そして壁に掛かっていた折りたたみ椅子を広げて座ると、彼女は鉛筆を片手に俺を観察し始めた。

ちょっと、待て。

まだ、心の準備ができてない……。

俺はうるたえる。

「ちょ、ちょっと待てよ。もう始めるのか？」

「だって早くしないとリュウ兄の気が变っちゃうかもしれないじゃん。それにもう夜も遅いし。」

「こ、こんなところじゃ、嫌だ。」

「えー！じゃ、どこ行くの？」

「どっか、もつときれいなとこ……。」

俺は初めて体験する女の子みたいにダダをこねた。

その途端、桃子はスケッチブックをバン！と床に叩きつけた。音にビククリして俺は思わず首を竦める。

ヤバイ。

もう既に目がギラギラしている。

「リュウ兄！往生際が悪いよ！男でしょ？」

彼女に怒鳴られ、俺は仕方なく作業着のファスナーに手をかけた。

変な緊張感だ。

桃子はギラギラした目で俺を観察している。

俺はその視線を感じながら、オイルで汚れた作業着を脱ぎ、中に着ていたTシャツを脱ぐ。

素肌にまだ冷たい部屋の空気が触れた。

「待つて、そのまま！」

上半身が完全に顕わになったところで、桃子が制した。

叱られた子供のように、俺はそのまま硬直する。

桃子はすごいスピードでスケッチブックに鉛筆を走らせた。

彼女の目は異様な光を放ち、顔は真剣そのものだ。

俺は勘違いしてた。

あのハムスター顔で、エロおやじが覗き見るように見られるんだ
と思ってた。

今の彼女にそういった俗っぽい思考は完全にシャットアウトされて
いる。

品定めをする商人のような冷たい視線。

あるいは、科学者が実験動物を観察する目だ。

正面から描き終わると、今度は俺の背後に回って描き続ける。
目だけ動かして、俺はスケッチブックをチラ見した。

それを見て、思わず息を呑む。
すげえ・・・。

半端なく上手い。

俺の肋骨とか、筋肉の動きまで鉛筆で描いた陰影だけで表現されている。

ドラえもんの絵描き歌さえともに描けない俺みたいな人種もいるのに。

これが才能ってヤツかな。

たった一本の鉛筆でこんな絵が描けるなんて、俺は感動すら覚えた。

桃子は真剣だ。

この一本の鉛筆で、夢を叶えるために立ち向かってる。

俺は覚悟を決めた。

「ありがとう。リュウ兄ちゃん。あの・・・。」

一通りのポジションから描き終えた後、桃子は口籠る。

セカンドステージに行きたいらしい。

俺は黙って腰のベルトを外した。

彼女は満足そうに、再び折りたたみ椅子に腰掛けると、鉛筆を顔の前で振りながら観察を再開した。

ベルトを外し、作業ズボンを脱ぐ。

そして最後の砦のトランクスに手をかけた時、俺の脳裏にあのダビデ像が浮かんだ。

ダビデもこんな気持ちだったんだろうか・・・。

部屋の空気は素肌に冷たかった。

が、不思議と寒さを感じない。

一糸纏わぬ状態になった俺に向かい合って、桃子は顔色も変えなかった。

ギラギラした視線で俺を観察している。

全裸で突っ立っている兄と、それをスケッチする妹。

今の俺たちはかなり異常に見えるに違いない。

綾香の前だってこんなことしたことなかった。

でも、今となっては綾香が俺の裸に興味があったかも疑問だ。

彼女が最後に俺に求めてたもの。

それは多分、職業とか、学歴とか、収入とか、人気者であるとか、抽象的で掴めないもの、そして俺にはどうしようもないことだった。

反対に今の桃子は、俺のこの体しか目に入っていない。

全身全霊で、俺の裸体のみと向き合っている。

高卒の低所得機械工というレッテルは、彼女から見た俺の体には張られていないんだ。

自分の価値が認められたような・・・。

彼女の真剣な視線を感じる度、つまらない俺の人生さえも報われていく気がした。

1時間も経っただろうか。

もっと短い時間だったかもしれないけど、直立不動だった俺には長

く感じられた。

桃子はスケッチブックを床に置いて、椅子にもたれて伸びをした。集中力も限界らしい。

「リュウ兄、ありがとう。今日はここまでにしよ。」

「あ、ああ。分かった。」

俺も我に返って、床に放置していたトランクスを拾い上げた。
「・・・！」

その途端、桃子は声にならない声を上げた。

俺を見ないように慌てて、スケッチブックで顔を隠す。

何を今更照れてるんだ？

今まで散々見てたくせに。

彼女の豹変ぶりに俺は苦笑しながら、作業スボンに足を通した。

「何だよ？今更。満足したか？」

「うん、ありがとう。今日はここまでだけど、次もお願いしていいの・・・かな？」

顔を赤らめながら、桃子は恥ずかしそうに言った。

第9話

その日から、真っ白だった俺のスケジュールに、桃子との約束が書き込まれることになった。

毎週金曜日の夜。

仕事が終わってから俺は桃子の待つ学生寮に向う。

俺の覚悟に応えるように、彼女も俺に対する態度を改めたようだった。

まず、足の踏み場もなかった部屋がきれいに掃除されている。

あれだけ散乱していた雑誌や、洗濯物はどこかに片付けられ、小さな部屋がガランとして広く感じる。

その部屋の中央には彼女が座る折りたたみ椅子に、キャンバスが載ったイーゼル。

ヌードモデルの俺が横たわるベッドには真っ白なシーツが掛けられている。

彼女のモデルと芸術に対するリスペクトの表れだと、俺は受け取った。

何度かやっているうちに俺も恥ずかしさを感じなくなってきた。

元から兄妹だし、幼い頃は風呂にも一緒に入ってたんだから当然の成り行きだったのかもしれないけど。

俺が服を脱いでいる間、桃子は既に自分の世界に入っている。

脱いでいる俺の姿まで、スケッチに収めようとエンピツが動き出す。全裸になって、真っ白なシーツの上に横たわると、彼女は患者を前にした医者さながらに俺の体を観察し始める。

そこに恥じらいとか、卑猥な感情は全くない。

彼女にとってこの裸体は、被写体に過ぎないのだから。

それが分かってから、俺も照れてる場合ではなくなった。

彼女が俺をモデルとしてリスペクトしてくれるなら、俺もそれに応えなければならぬ。

最初はさすがに抵抗があつた下半身も、彼女の指示通り開示するようになった。

傍から見たら異様な光景、異常な兄妹だつたに違いない。だけど、俺たちはお互いに真剣だつた。

そしてそれは、俺にとっても楽しい時間になつていった。

認めたくないけど、俺は彼女に見つめられた時のあの緊張感に快感を覚え始めていた。

赤いフレームの眼鏡の奥から睨みつける桃子の鋭い目。

蛇に睨まれた蛙つてこんな気持ちなんだろう。

俺は桃子の視線だけで、体の自由を奪われてしまう。

見られている恐怖と、緊張、そして変な優越感と興奮。

俺の体を桃子は貪欲に手に入れようとしている。

大事なものを逃さないように、必死で描きとめる。

その視線を感じていると、自分が価値のある男であるような錯覚さえ覚えてしまうのだ。

古今東西、裸婦を描いた名作は沢山あるけど、モデルの彼女達が裸のまま照れもせず、どうして堂々としているのかが分かった。

モデルの価値は画家の視線によって与えられるんだ。

日頃はつまんねえ機械工の俺にも、見てもらえるものがあつたのかな。

綾香には評価低かつたけど。

ベッドに腕枕で横になつたまま、俺はスケッチブックと睨めっこし

ている桃子を微笑ましく見つめるのだ。

事件はそんなある日に起こった。

「あー！今日はもうダメ！集中力ギレ！」
半分、眠りに入っていた俺は、桃子の声にビクッとして起き上がった。

桃子は勢いよく折りたたみ椅子の背もたれに体を仰け反らすと、そのまま体の重みで椅子ごと後ろに倒れた。

ドー・・・んと、地響きがして小さな部屋の天井からホコリがパラパラ落ちてくる。

「・・・お前、何やってんの？」

呆気にとられて、俺はひっくり返ってる桃子を見つめた。

ゴロンと丸い体をひねって、桃子はムクッと起き上がった。

その姿はダルマさんのようだ。

テヘへと照れ笑いしながら頭を掻いている桃子は、俺と目が合った途端にアッと息を呑み、赤面して顔を伏せる。

その視線の先には何も纏っていない俺の下半身があった。

既にいつもの桃子に戻っているようだ。

その見事なまでのスイッチぶりに、彼女のプロ意識を感じる。

だけど。

今まで見といて、そりゃねえだろ？

俺は照れまくっている桃子をからかってやるつもりで、彼女の腕を掴んだ。

そのままその丸っこい体を抱きしめてベッドに引き釣り込む。

「え、ちょ、ちょっと、リュウ兄？」

されていることが把握できてない桃子は、バタバタしながら甲高いアニメ声を出す。

太っているとはいえ小柄な桃子の体は、俺の腕の中にスッポリ納まってしまう。

抵抗してくる彼女の両腕を押さえつけて俺は笑った。

「おまえさ、俺がソノ気になったらどうすんの？」

もー、バカじゃないの？リュウ兄なんかゴメンですう・・・

俺は、そんな軽い返事を期待してた。

そのつもりの軽い冗談だったのに。

桃子は、俺の腕の中で目を見開いて硬直していた。

厳密には硬直ではない。

体中が極寒にいるかのように、ガタガタ震えている。

完全に血の気が引いた丸い顔に、涙がボロボロこぼれ出した。

俺は、慌てて手を離して彼女を解放した。

ヤバイ。

泣かせてしまった。

「お、おい。桃子？冗談だって。そんな気ないって。ごめん！謝る。泣くなよ！」

テンパって、俺は思いついた言葉を何でも言ってみる。

彼女はベッドで硬直したまま、宙を見つめている。

尋常でないその姿に俺は動揺した。

ど、どうしよう。

てか、大した事じゃねえだろ。

でも、相手が女の子だったことは忘れてたかもしれない。
俺は軽はずみな行動を後悔した。

やがてのそりと桃子は起き上がった。

ベッドの上に座り込んで、俺を恨めしそうに睨んでいる。
その目からは涙がポロポロ流れ落ちていた。

「リュウ兄……。言っとくね。」

言いかけて、彼女は唇を噛み締めた。

言おうか言うまいか迷っているみたいだ。

しばしの沈黙の後、顔を上げた彼女は言った。

「あたしね、男の人が怖い。男の人とこういう事、できなくなっ
ちやっただの……。」

第10話

桃子はすすり泣きながら、両手で顔を覆った。丸っこい肩が嗚咽する度、上下に震える。

俺はどうしたらいいのか分からなくて、しばらくバカみたいにその場で立ち尽くしていた。

今、何をすべきか。

ハタと気付いた俺は、まずトランクスを履いて、職場の作業着を肩に羽織った。

泣いている桃子にこれ以上刺激を与えないように、俺は静かにベッドに近づく。

俺のせいで乱れた長い黒髪をそつとなでる。

彼女は俺の手の感触に、ビクッと体を震わせた。

「桃子、ごめん。俺、そんなことしないって。冗談だよ。夕チ悪かったけど。」

彼女の横に体が触れない程度に近づいて座って、俺はもう一度謝った。

桃子は顔を手で覆ったまま、首を横にブンブン振った。

「リュウ兄ちゃんのせいじゃないんだ。あたしが・・・あたしが、男の人が怖いだけなの。い、今、リュウ兄も男の人なんだって思い出しちゃって、そしたら急に怖くなっちゃって・・・。」

そこまで言っていると桃子は再び、すすり泣きを始めた。

まいったな・・・。

女の子にする冗談じゃなかった。

俺は舌打ちして、髪をガシガシ掻いた。
でも、男とこういうことができなかったって？
その過去形の言葉に俺はふと気付いた。
え？それって、まさか……。

「桃子、お前ってさ……。処女じゃないの？」
俺は恐る恐る聞いた。

桃子は一瞬、ビクッと体を震わせた。

顔を覆っていた両手を少し離して、泣きはらした赤い目で俺を見る。
すがり付いて来る様な、怯えた目だった。

彼女は震える声で、小さく言った。

「そうじゃなかったら、リュウ兄、軽蔑する？」

「しないよ。する訳ない。ただ……。」

意外だった。

絶対、経験ないと思ってたのに。

その物好きな相手は誰だ？

その言葉を、俺は何とか飲み込んだ。

桃子は小さな声で、ポツリポツリ話し出した。

「前さ、リュウ兄、どうしてあたしがBL好きなのかって、聞いたよね。」

「あ、ああ……。」

「男の子同士のセックスなんて遊びみたいなモンでしょ？誰も傷ついたりしないでしょ？だから、あたし安心して読めるの。」

でしょ？と同意を求められても……。

俺は眉間に皺寄せて、考えてみる。

どうなんだろう？

「分かんねえよ。俺は男としたことないから・・・。」

返答に困った俺は的を得てない事を言ってしまう。

俺は桃子が言いたいのか把握しきれずにいた。

桃子は構わず喋り続ける。

「女の子にとってセックスはリスクだらけだよ。痛かったり、妊娠したり、蔑まされたり、辛いことばかりじゃない。だから、あたし男女のセックスは大嫌いなんだ。女の子は傷つくだけだもん。」
「桃子・・・まさか、お前・・・？」

それってどういう意味だよ？

俺は最悪の想像をして、口籠った。

口に出すのもおぞましい。

俺の言いたい事に気が付いた彼女は、ああ、と言って少し笑った。

「妊娠はしてないよ。でもするんじゃないかと思ってすごく怖かった。生理がくるまで全然眠れなかったもん・・・。あたし、突然襲われたの・・・学校の先輩に。」

何だと？

俺はハンマーで殴られたような衝撃を覚えた。

襲われたって言った？

全然、知らなかった。

その時、俺、何してたんだ？

この能天気なハムスターのような桃子がそんな辛い事を、誰にも言えずにいたなんて・・・。

「それからあたし男の子とセックスできなくなっちゃったの。男の子が怖い。リュウ兄ちゃんのことは大丈夫なんだけど、今みたいに触られたら、その時の事がパッと頭に浮かぶんだ……。あたしもう汚れちゃってるんだって、思い出しちゃうの……。あたしは……」

そこまで言いかけて、桃子は突然口元を手で押さえた。

ベッドから飛び降りて、台所まで走ってシンクに顔を突っ込むと、胃の中のものを吐き始めた。

慌てて俺も駆け寄り、ゲロゲロ吐いている桃子の背中をさすってやる。

吐きながら、桃子は泣いていた。

涙と一緒に汚れた体の中の不純物を全て流して出してしまうような、そんな泣き方だった。

ひとしきり泣いて吐き終わると、桃子は台所で座り込んだ。

俺も黙ってその隣に座る。

でも、何を言っているのか分からない。

口下手で不器用な自分の性格を、俺は恨んだ。

「ごめんね。リュウ兄ちゃん。あたし、リュウ兄が思ってたような女の子じゃないかも。」

「バカ、関係ねえだろ、そんなこと。お前はお前だ。それに男は怖くないから。」

「……怖いよ。あたしはもう……言っただでしょ？三次元の男の子には興味なくなったの。」

顔をタオルで拭きながら、桃子は自嘲的に笑った。

俺はそれが、悔しくて悲しかった。

お前にはまだ、未来があるのに。

これから本当にいい男だって現れるのに。

なんで、お前はこんなに絶望してるんだ？

気が付いたら、俺の頬にも涙が伝っていた。

桃子は驚いて、俺を見つめる。

「やだ、リュウ兄、泣いてるの？」

「・・・そんなこと言っなよ。おまえはまだ・・・未来があるんだから。」

俺は桃子を抱き寄せた。

少し抵抗した彼女を今度は優しく抱きしめる。

一瞬、強張った彼女の体の緊張が次第に解けていくのが分かる。

俺の胸の中で、桃子は再び泣き始めた。

悲しいすすり泣きだった。

俺はそのまま萎んで小さくなってしまった桃子を抱きしめていた。

第11話

やがて、少し落ち着いた桃子は、ぼつりぼつりと考えながらその時の状況を話し出した。

桃子が大学に入ったばかりの頃。

桃子は、所属するマンガ研究会の先輩に一目惚れをした。

秘めた思いを抑えられなくなった頃、桃子はそいつに告白する。

そいつは、意外にもあっさり彼女の告白を受け止めた。

その夜、そいつは見て欲しいマンガがあると言って、桃子を自分の下宿に誘った。

桃子が部屋に入った途端、鍵が掛けられ、桃子はベッドに引きずり込まれた。

ちょうど、今俺がやったみたいに。

かいつまんで言えばこんなところだ。

俺は溜息をついた。

桃子の涙で忘れていた、加害者に対する怒りが俺の中にやっと湧き上がってきた。

強姦じゃねえのかよ、それって……。

しかも、犯人は誰だか分かってる。

そいつはのうのうと学生生活を続けているというから、尚さら驚いた。

何で今まで何もしないで黙ってたのかが、逆に俺には分からない。

「お前さ、それ、警察に言った？」

俺の質問に、桃子はブンブン首を振る。

「そんなこと、誰にも言いたくないよ。それに、あたし彼が好きだったから……。バカみたいだけど、誘われた時嬉しくって、自分から彼のマンションに入ったの。それは合意の上だから立件できないって……。」

「誰が言った？」

「……。彼が。だから人に話しても無駄だって……。」

合意じゃねえだろ。

どう考えても、それは計画的犯行だ。

しかも、慣れてる。

多分、桃子が初めてじゃない。

自分が女の子にモテるのを知ってて、自ら近寄らせて、弱みに付け込んでくる。

タチの悪いやり方だ。

俺は、タバコに火をつけて煙を吸い込み、一気に吐き出した。一服しないと、怒りで部屋を破壊しそうだった。

「お前よく今まで我慢してたね。俺は全然気付かなかった……。」

そうだ、俺は何にも知らなかった。

この能天気な笑顔の裏に、そんな痛みを隠してたなんて。

頭を抱えて肩を落とした俺に、桃子は優しく言った。

「その時は、すごくショックで、死んじゃおうかって考えたよ。でも、あたしは夢があるもん。こんなことで……。あの人の為になんか夢を諦めなくなかったの。だから、もう平気。」

そんな健気なこと言うな・・・。

俺はまた涙が出てきて、目をゴシゴシ擦る。
それを見て、桃子は少し笑って言った。

「不良のリユウ兄ちゃんの泣くところ、初めて見たよ。高校の時、補導されても泣かなかったのにね。」

「バカヤロー……。補導された時だって泣きたかったよ。俺にも拳銃があればって……。」

「その後、警察に迎えに行ったお母さんが泣いてたね。」

「往復ビンタされた。その時も泣きたかった。」

俺たちは泣きながら、笑った。

「でもさ、今からでも遅くねえだろ？俺からそいつに何か言うてやるうか？」

そうだ。

このままじゃ、気がすまない。

一度はその男のツラ拝ましてもらわねえと。

だが、桃子は黙って首を横に振った。

「本当にもういいの。もう済んだ事だし、蒸し返すの嫌なの。思い出したくもないし……。初体験はちょっと辛い思い出になっちゃったけど、あたしには夢があるもん。」

初体験……。

女の子にとっては一生に一度の思い出だろうに。

努めて明るく話そうとする姿が、一層痛々しく見えた。

その時、俺はいいことを思いついた。

俺が一番満足できる、唯一の方法。

「桃子、そいつが今度大学に来るのいつだ？」

「4月4日の始業式。この日は授業はないけど、全員出席だから。でも、何で？」

桃子は怪訝そうな、不安そうな顔で俺を覗き込む。

俺は笑って言った。

「お前が嫌がるなら、そいつには何にもしねえよ。でも、リベンジしたくないか？」

「リベンジ？」

桃子は首を傾げる。

「そう、リベンジ。そいつよりイケてる男連れて、見せ付けてやるうぜ。男はバカだから、振った女に別の男ができると、逃した獲物は大きかった気がするんだよ。その男が自分よりイケてたら尚更な」

「それは・・・確かに面白そうだけど・・・。誰？その彼よりイケてる人って。」

誰？じゃねえだろ。

こんなにイケてる奴が目の前にいるのに。

俺は自分の胸に親指を突き立てた。

「ええ？リュウ兄ちゃんか？」

「ええって何だよ。その日、俺も会社サボッてお前の大学行くからな。大丈夫、今風のイケメンぱく振舞うから。俺を恋人として連れて歩け。分かったな。」

桃子は困惑気味に俺を見つめてから、渋々頷いた。

第11話（後書き）

ここで、第1章終了です。

ここまで読んで頂いた方々、ありがとうございます。
次なる展開にご期待下さい。（^^）

第12話

4月4日、始業式の朝がきた。

学校に行く準備も整ったあたしは、ベッドに横になって今まで描き溜めたリュウ兄ちゃんのスケッチをパラパラめくっていた。

自分で言うのもナンだけど、この一月でかなりデッサン力上がっていると思う。

動きのある実物を至近距離で観察できるんだから、こんな恵まれた環境はないけどね。

このままの勢いで次の作品に取り掛かれれば・・・。

何だかいい結果が出そうな気がする。

でも、あたしの作品に足りないモノは画力だけ？

もっと基本的なものの忘れてない？

リュウ兄は、俺、分かんねえ・・・ってぶっきらぼうに言うに決まってるけど。

リュウ兄の体は本当に綺麗だ。

これほど似てない兄妹って珍しいと、自分でも思う。

背は高いし、手足も長い。

痩せ型に見えて、脱ぐと筋肉のついた分厚い肉体が現れる。

顔だって、もっと小綺麗にすればカッコいいのに。

浅黒い肌に切れ長の鋭い細い目、シャープな顔のライン。
精悍な顔立ちだ。

無造作に後ろに掻き上げたボサボサの黒い髪は、ロングというより
長髪と言った方がしっくりくる。

腕や、足には昔の複雑骨折の手術の傷痕が生々しく残っていた。

今では落ち着いて会社員やっているリュウ兄は、高校までは暴行事件の常習で、何度も家に警察から電話がかかってきたのをあたしも覚えてる。

工業高校の空手部で有段者だったリュウ兄は喧嘩で負けたことがない。

学校内で喧嘩して相手を病院送りにしたり、深夜の繁華街で酔っ払いと喧嘩して補導されたり、その度に迎えに行くお母さんが可哀相だった。

でも、あたしはリュウ兄が好きだ。

子供の頃はあたしが苛められてたら、すぐやって来て助けてくれた。助けるどころじゃない。

あたしがその子を助けなきゃなんないほど、半殺しの目に合わせてた。

下宿を始めてから、リュウ兄はお母さんに届け物を頼まれるとやって来るようになって、あたし達は話をするようになった。

無口なリュウ兄はいつも、タバコを吸いながら黙ってあたしの話を聞きいてくれる。

あたしはリュウ兄と一緒にいる時間が好きだった。

スケッチブックの中の彼の完璧な肉体を見て、あたしは溜息をついた。

二人の体には同じ血が入っている筈なのに、この違い……。

あたしなんか、男の子に相手にされる訳ないもんね。
いいもん。

あたしには夢があるんだから。

今思えば、先輩だつて最初から相手にする気なんかなかったんだ。
あたしがバカみたいに勝手に喜んじやったんだ。
あたしはリュウ兄に、佐藤先輩に襲われた事を話したのを少し後悔
していた。

去年の夏。

大学に入ってから初めて好きになった人に、あたしは告白した。
佐藤裕也先輩。

ジャニーズみたいなかawaii顔で、小柄な細い体は少年みたい。
いつか皆の前で彼が嵐のモノマネをしながらバック転した時があつ
て、それから彼の異名はアイドルになった。

彼が笑うと、周りもぱっと明るくなる。

白い肌に整った顔立ち。

ヒゲも生えてない綺麗な肌。

ウェーブがかつた茶色の猫っ毛の髪は、風に吹かれるとクシャクシ
ヤになって、それを掻きあげる仕草がまたかわいい。

絵に描いたような永遠の少年みたいな人だ。

厭味のないオシャレをよく知っていて、普通のシャツの上にストー
ルをさりげなくかけたりして、センスの良さを感じる服装をしてい
る。

彼は関東出身で大学の為に、ここに下宿していた。

彼が話す東京っぽい標準語が、まるでドラマから出てきた主人公み

たいたった。

あたしみたいな地元出身の田舎の女の子には憧れだった。

あたしは、彼にされたことを強姦だとは思ってなかった。

実際、誘われてノコノコついて行ったのはあたしだし、終わった後も彼は天使の顔でニコニコ笑ってた。

「良かったでしょ？」

悪びれもせず、彼は言った。

どんな悪行もこの微笑の前では陰を潜めてしまう。

あたしを押し倒し、口を塞いで腰を振っていた悪魔みたいな彼と、悪戯を見つけた子供みたいに肩をすくめて無邪気に笑う天使みたいな彼はどうしてもリンクしないのだ。

後日、学校で会っても彼はアイドルみたいな顔で、オハヨって挨拶してくれた。

あたしが話しかけようとすると、彼はニツコリ笑ってこう言った。

「ついて来たのはキミだからね。合意のことだから、人に言わないほうがいいよ。」

いつも通り、何にも変わっていなかった。

もちろんその後、彼があたしを誘うことはなかった。

何にも変わらない日常の中で、あたしだけが大切なものを失ったのだ。

あたしはそれから男の人が怖くなった。

男の人って分かんない。

いつ悪魔に変貌するか、あたしには予測できない。

男なんて性欲も自分で制御できない人種なんだ。

それからあたしはBLにハマリ始めた。

それまでは学園のアイドルが主人公の女の子と付き合い出すような少女マンガばかり読んでたのに、それが読めなくなったからだ。

アノ時の、天使のように微笑む悪魔の顔を思い出すから。

リュウ兄に押し倒された時、その時のことがパッと目の前に浮かんで、あたしは吐き気がした。

先輩より、もっと大きくて重いリュウ兄の体に押さえ込まれて、あたしは言いようのない恐怖を感じたんだ。

初めての経験で、あたし自身もビクリした。

これがフラッシュバックっていうのかな。

既に自覚はあった。

男の人とセックスに対して、あたしはトラウマを抱えてしまったんだ。

あたしは溜息をついて、スケッチブックを閉じた。

その時、窓の外から車のエンジン音が聞こえた。

あたしを呼び出すように、パッパとクラクションが鳴らされる。

窓から顔を出して外を見ると、いつものリュウ兄ちゃんの黒い車がエンジンをかけたまま止まっている。

うわあ、本当に来た。

やる気なんだ、リベンジ作戦。

あたしは慌ててスケッチブックをカバンに押し込んだ。

そのカバンを肩から襷掛けして、部屋を飛び出した。

第13話

車に駆け寄って、あたしはいつもみたいに窓ガラスを叩いた。助手席のドアが開くのを待って、よっこらしょつと掛声をかけながら、お尻から中に入る。

「おはよう、リュウ兄。本当に来たんだ・・・。」

そう言いながら、あたしは運転席を振り向き、言葉を失った。そこにはあたしの知らないイケメンが啞えタバコであたしを見ていた。

それは、紛れも無くリュウ兄ちゃんだった。

ボサボサだった黒髪は短く切られ、ワックスで綺麗に整えられている。

整髪料のコマーシャルに出てくるタレントみたいだ。

眉毛まできちんとカットされてて、切れ長の目元が涼しい。

お馴染みの群青色の作業服は当然今日は着ていない。

細身のストレートのジーンズにVネックの黒いシャツ。

体にフィットしたシャツから出た逞しい首のラインがセクシーだ。

その上から無造作に黒いパーカーを羽織っている。

たったそれだけなのに、リュウ兄はユニクロのモデルみたいに決まっていた。

口を開けて、見とれたあたしのホッペをリュウ兄はビヨンと引張る。

「オバサン臭いんだよ、お前は。黙って乗れないのか？」
タバコの煙を吹きかけられ、あたしはコホコホ咳をした。

「だ、だって、リュウ兄ちゃん。すつごい。別人みたいじゃん。イケてるよ！」

あたしは興奮して、手を叩いた。

照れくさそうに彼は再びタバコを咥える。

「だって、そいつよりイケてないとリベンジになんねえだろ？・・・てか、髪切っただけだし。俺はモトがいいんだよ。」

そう言いながらも彼の顔は赤くなった。

見れば見るほどに、あたしと似てない。

あたしとお母さんはウリ二つなのに。

きつとリュウ兄は、子供の頃離婚してなくなったお父さんに似てるんだ。

あたしはまじまじと彼の顔を見つめた。

「で、学校どこだよ？絶対にそいつはいるんだろうな？」

「あ、うん。今日、始業式があつて、授業の発表があるの。だから、全校全員出席なんだ。」

「よし。そいつの名前は？」

「・・・佐藤裕也・・・君」

あたしは躊躇いながら、その名を口にした。

「ねえ、でも、喧嘩しないでよ。リュウ兄、もう未成年じゃないんだから。今度は補導じゃなくて逮捕されちゃうよ。」

「分かつてる。今更そんなことしねえよ。お前にだって迷惑かかるしな。」

彼はひらひら手を振ってみせる。

それを聞いて、あたしは少しホっとした。

あたしはリュウ兄が暴行事件を起こす事だけが心配だったから。正直なところ、このリベンジ作戦にはあたしは乗り気だった。

先輩はあたしがモテないのを知ってて、ばかにしてる。

だから、彼氏がもしできたら、見返してやるのがあたしの野望の一つだった。

結局、二次元の世界にハマってしまって、それは実現できなかったんだけど。

一時でもいい。

先輩を見返すことができたなら、あたしはきっと満足する。

そして何かが変るんじゃないかと、期待してた。

「おし、いくぞ。今日はお前は俺の彼女だ。俺のことはリュウって呼べ。」

リュウ兄はそういうと、アクセルを踏み込んだ。

第14話

久しぶりの大学は、人でごった返し、すごい活気だ。

いつもは全ての学生がいるわけじゃないから、全員集合になるとこんなに人が在籍していたことに驚く。

新入生つばい、まだあどけない顔をした生徒達も集団でうろつろしている。

それを見つけては勧誘チラシを配る体育会系クラブの集団。

特色を見せようと、各部ユニフォームで勧誘しているので、キャンパスはさながら仮装大会だ。

リュウ兄はキョロキョロしながら、あたしの横を歩いている。大学に行っていないリュウ兄には、初めての光景かもしれない。

「空手部あんのか？」

「あると思うよ。あたしは興味ないけど。」

「俺、入ろっかな？」

「勧誘されないよ。新入生に見えないじゃん。」

背が高いリュウ兄は歩いているだけで、目立っていた。が、誰も彼を新入生とは思わないだろう。

新入生どころかOBの風格だ。

その時、リュウ兄の手があたしの手を掴んだ。

「何？」

驚いたあたしに彼は、アレ、と言って指を指す。

その方向には手を繋いで歩いている、カップルがいた。

「俺達もやろつ、アレ。」

「えー！恥ずかしいよお。」

「うるせえ！黙ってやりゃいいんだよ、ホラ！」

リュウ兄はあたしの手を自分の腕に巻きつける。

そ、それはやり過ぎでは・・・？

ただでさえ目立ってるリュウ兄に、あたしは腕に巻きつき、寄り添い歩いてる。

当然、周りは羨望の眼差しだ。

遠くから、女の子集団がキャッキヤ言いながらこちらを見つめている。

多分、何であんな人が、あんなデブと歩いてるのって言われてるんだろつなあ・・・。

リュウ兄の気持ちは嬉しかったけど、彼に対して何だか申し訳なくなつた。

でも。

確かに気持ちいい。

皆に見られてるこの優越感。

リュウ兄が兄ちゃんじゃなかったら良かったのに。

でも、兄ちゃんじゃなかったら、相手にもしてくれないかな？

「あー！モモタン！見いつけたあ！」

突然、背後から甲高い声で呼ばれて、あたしはギクつとして振り向いた。

親友のエミリンが、こちらに向ってダダダ・・・と駆け寄ってくる。

あたしと同じくらい、小さくて元気なエミリンは、本名は鈴木恵美子。

眼鏡に、おでこを出したポニーテール、そしてやっぱり、ぽっちゃり系。

大学に入ってから、同じマンガ研究会で知り合い、それからBL仲間になった。

地元が静岡県のエミリンは、春休みの間、帰省していて久しぶりの再会だった。

あたしたちはキャーキャー甲高い声を上げて、抱き合った。

「エミリン、久しぶりい！里帰り、どうだった？」

「あつという間だったよ。あ、モモタンにお土産買ったしね。ワサビ茶漬け。後で渡すよお。」

あたしたちが抱き合って再会を喜んでる間、リュウ兄はまさに苦虫を潰した顔であたし達を見下ろしていた。
ついていけねえ、って顔が言っている。

「あ、モモタン。このイケメン誰？怪しいぞおお？」

エミリンはあたしのお腹を突付いて、ニヤリと笑う。

親友のエミリンだけど、今日だけは騙しちやおっかな。
あたしはわざと、リュウ兄の腕に巻きついて言った。

「紹介しま〜す！モモタンの彼氏のリュウ君でーす！」

あれ？

さっきまで、恥ずかしかったのに。

一度開き直ったら、なんか調子出てきた。

我ながら、ふてぶてしい性格だ。

あたしに巻き付かれたリュウ兄の拳が震えている。

調子にのんな、このやろうつて声が聞こえてきそうだ。

でも、リュウ兄は背の低いエミリンのために少し体をかがめて、笑みを見せた。

うわ！

リュウ兄ちゃんが笑った。

すごいサービス精神だ、こりゃ。

「初めまして。彼女がお世話になってます。」

リュウ兄ちゃんに笑いかけられたエミリンは、真っ赤になって手を振った。

「そ、そんなあ！こつちこそお世話になってますよお。モモタンはエミリンの大事な友達なんですよお。」

「そうみたいだね。ありがとう。」

必死に作り笑いをするリュウ兄。

B.L友達だつてことは、もう分かっているみたいだ。

エミリンはあたしの手を引っ張って、ヒソヒソ内緒話を始めた。

「ねえ！カッコいいんですけど。モモタンいつから付き合ってたの？」

「えー、昔っから知ってる人だったんだよ。最近、コクられたの。」

テキトーに言っただけど、嘘ではないから大丈夫かな？

なんか、いい気分だ。

今まで彼氏なんかいなかったあたしは、完全に舞い上がってしまった。

「ねえ、モモタン。さっき学食に佐藤先輩いたよ。」

エミリンは眉間にしわ寄せて、あたしに囁いた。

佐藤先輩。

その名前を聞いただけで、あたしの体は強張る。

エミリンだけには、あたしは秘密を打ち明けていた。

「モモタン、リュウ君連れて行って、あいつの前で見せつけちゃいなよ。あいつ、また今年の新入生狙ってるよ。もー、ムカつく！ちよっと自分がかっこいいからって調子に乗ってたんだよ。」

エミリンはあたしの代わりにプンプン怒ってくれる。
気持ちは嬉しいけど。

被害者は案外、事を荒立てたくないものなんだ。

「行こう！モモタン。リュウ君とあいつの前でいちゃついちやえ！」
エミリンはあたしの腕に絡み付いて、食堂に向って歩き出す。

そうだ。

リュウ兄はその為にここに来てくれたんだ。

そして、あたしも何かが吹っ切れるかもしれない。

これはあたしが変わる為に、やり遂げなきゃいけない儀式だ。

あたしは、決意を固めて頷いた。

「うん、行こう！リュウ君！・・・あれ？」

そこには、女の子達に囲まれて熱烈勧誘を受けているリュウ兄がいた。

山のようにチラシを手渡され、困った顔でもみくちやにされている。

このいかつい男の人を、新体操部が一体何の為に勧誘してるのかは、分かんないけど。

結構、学校に馴染んでるリュウ兄を見て、あたしは苦笑した。

第15話

あたしはリュウ兄と手を繋いで別館の食堂に続く階段を上って行った。

エミリンは邪魔をしないように、気を利かせながら少し後ろを付いて来てくれる。

食堂は2階建ての別館の屋上にあつて、ガラス張りの外観がオープンカフェみたいな洒落た建物だ。

ガラスのドアを開けると、することがない沢山の学生達が、休み明けの久々の再会に話を弾ませていた。

100席以上のテーブルがあるんだから、かなり大きい食堂だ。でも、あたしは佐藤先輩がどこにいるのか、もう分かっていた。

自販機じゃない、本当のブレンドコーヒーがウェイトレスさんによつて作られるちよつとリッチなカフェコーナーがある。

この食堂で一番人気のホットサンドは、ここで作られ、すぐに食べれる。

お洒落なカフェバーみたいな場所だった。

そのコーナーの真ん前のテーブルに、今日も佐藤先輩は取り巻きと一緒にたむろっていた。

あたし達は、彼らの視界に入らないテーブルを隠れるように陣取った。

エミリンがジュースを三人分買いに席を立った時、リュウ兄はテーブルの下からあたしの足をつま先で突付いた。

「おい、どいつだ？」

「あ、あの席の真ん中に座ってるジャニ系で茶髪の子。チェックのシャツにストールかけてる……。」

「あのチビか？」

「……うん。」

「お前の好きなマンガに出てくるやられる方のタイプだな。」

あたしはリュウ兄の容赦ない感想に、思わず吹き出した。

「……何、それ？」

「だって、そうじゃん。何であんなのが良かったんだよ？毛も生えてなさそうだ。俺の方が絶対デカ・ぐっ！」

下品な台詞を最後まで言わさないようにあたしはテーブルの下でリュウ兄の足を蹴った。

確かにそういうタイプだ。

だからあたしは好きになったんだと思う。

穢れのない、永遠の美少年。

ヒゲもスネ毛も、ワキ毛も絶対に生えてきてはいけない。

どうしてBL好きはこういうのに弱いのか、自分でもよく分からない。

彼という人間像を勝手に作り上げてしまったあたしは、最後まで本質を見抜くことができなかったんだ。

その時。

リュウ兄は突然、ゆらりと立ち上がった。

その視線の先に、こちらを見て取り巻きの女の子達とヒソヒソ話し

ては笑い転げている先輩の姿があった。
あたし達に気付いたらしい。

佐藤先輩は時々、あたしの方を指差しては何かを取り巻き連中に話す。

その度に輪の中に笑いが起こった。

間違いない。

あたしのこと、笑ってる。

「ちょ、ちょっと待って。リュウ兄ちゃん。何するの？」

「大丈夫だよ。ちょっと挨拶してくるだけだから。」

リュウ兄はニヤッと笑って先輩達のテーブルに向って歩き出す。

その目はもう笑ってない。

興奮でギラギラしている。

ヤバイ。

完全にイっちゃってる目だ。

リュウ兄は戦闘モードに入っちゃうと、制御が効かないんだ。

この辺の性格はあたし達はすごく似てる。

あたしは慌てて、リュウ兄の後を追っかけた。

佐藤先輩とその取り巻き達が5人ほどたむろっているテーブルの前に、リュウ兄はゆらりと立ちはだかった。

突然やってきたこのデカイ男を前に、一同シーンと静まり返る。

佐藤先輩だけが、恐怖を隠すかのようにヘラヘラしながらリュウ兄を見上げ、そしてあたしを見た。

「あ、後輩の藤井さんじゃん？この人彼氏？なんかアブナイ人っぽいけど？」

佐藤先輩はあたしに言った。
言い返せなくって、あたしは黙って下を向く。
そこにリュウ兄が口を挟んだ。

「そうですよ。今、ぼくは桃子さんと付き合ってます。以前、彼女があなたと付き合ってたって聞いて、ぼくはどんな人が気になって来てみたんです。」

リュウ兄は造り笑いをしながら丁寧に佐藤先輩に答えた。
でも、あたしには分かる。
もうリュウ兄は爆発寸前だ。

「マジ？あんたかつこいいのに悪趣味だね。もしかしてデブ専？オレはこんな男だよ。見ての通り。」
ぎやはは・・・と必要以上に大きな声で先輩は笑った。
それに合わすかのように、周りの取り巻き連中も笑い出す。

「彼女とは付き合ってたんですか？」

リュウ兄ちゃんが佐藤先輩を睨んで言った。
それを聞いて、先輩は更なる大声でバカ笑いをした。

「オレが付き合う訳ないつしょ？悪いけど、このコ、そういう対象じゃないから。あんたみたいなデブ専ならともかく、オレには無理。」
ぎゃっはっは・・・という彼の高笑いがホールに響いた。

取り巻き連中も釣られて笑う。

あたしは聞きたくなくて耳を塞ぎたかった。
やっぱり最初から、そういうつもりだったんだ。

泣いてしまいそうだった。

リュウ兄ちゃんの異変に気付いたのはその時だ。

リュウ兄が笑ってる。

目をギラギラさせて、佐藤先輩を笑って見つめている。
ヤバイ。

もう完全にイっちゃってる・・・！

「そんだけ聞ければ上等だよ。このカマ野郎！」

あたしが止めるのが一瞬遅かった。

そう怒鳴ったと同時に、リュウ兄の長い足は先輩達が囲んでいた丸テーブルを蹴り上げた。

第16話

佐藤先輩はじめ取り巻き一同の目の前に、リュウ兄に蹴られたテーブルは反転しながら吹き飛ばされてきた。テーブルの上のコーヒークップや皿がバラバラ床に落ちて割れ、破片を撒き散らす。

女の子達は悲鳴を上げて、その場から飛び退いた。食器が割れる大きな音に、ホールは一時騒然となる。

飛び上がっていち早く逃げようとする先輩の襟首を掴んでリュウ兄は自分の顔の前に引き寄せた。

先輩の顔は恐怖で引きつっている。

それでも必死に反抗的な態度を取り続けているのはさすがだ。

それが、命取りになるとも知らずに……。

お願い、せめて抵抗しないで！

リュウ兄はホントに恐い人なんだよおお！

「こ、こんなことして暴行罪で逮捕だぞ、てめえ！」

顔をきつらせながら、先輩はまだ大口を叩く。

それを嬉しそうに聞いて、リュウ兄はヒステリックに笑った。

「上等だ。俺は傷害罪、てめえは強姦罪だ。叩けばホコリが出るのはどっちの体だか、よく考えて通報しな！」

その瞬間、リュウ兄のパンチが佐藤先輩の顔に炸裂した。

先輩の体はテーブルや椅子をなぎ倒して、10mほど吹っ飛んだ。

倒れたテーブルの隙間で仰向けに倒れてた先輩のほうに、リュウ兄は尚もゆっくり近づいていく。

あたしは、その背中にしがみ付いた。

「ダメだよ！リュウ兄！喧嘩しない約束だよ！」

「うるせえ！俺がそんない奴なわけねえだろ！実は最初っからこのつもりだ、どけ！」

あたしは軽く突き飛ばされ、尻餅をついてあっさり敗退。

どうしよう・・・。

もう誰も彼を止められない・・・。

美しい顔から鼻血を出して、先輩はムクリと起き上がった。

ポケットから携帯電話を出して、震える手でボタンを押そうとしている。

警察に通報する気だ・・・。

あたしが思う間もなく、リュウ兄は見事な回し蹴りで彼の手の携帯を蹴り飛ばした。

バキヤっ！と小気味良い音と共に、携帯は大きく弧を描いて宙を舞うと、はるか彼方の厨房の壁に当たって、バラバラになった。

「ワリイな。喧嘩で負けたことないんだよ。俺は。」

ギラギラした目で笑いながらリュウ兄ちゃんは、やっと起き上がった先輩の胸に蹴りを入れ、土足で踏み倒した。

その顔は完全にチンピラだ。

気管を圧迫された先輩の美しい顔が紫色に染まっていく。

「お、オレが何したんだ・・・よ？・・・てかアンタ・・・何モンだ？」

苦しい息の下から先輩は切れ切れに言った。

「何したか、だど？そんなこと、てめえで考えろ！俺は藤井隆一、藤井桃子の兄貴だ！」

そう言うと、リュウ兄の足は先輩の股間を蹴り上げた。

完全にノックアウト。

先輩は股間を押さえて蹲ったまま動かなくなった。

逆に、今までシーンとなつて状況をただ見つめていた群集が騒ぎ出した。

倒れている先輩の周りに女の子達がキャーキャー悲鳴を上げながら集まってくる。

「おい、桃子。逃げるぞ！」

ぼんやりしていたあたしの腕をリュウ兄はすごい力で掴んだ。

そのまま、グイグイ引つ張られて、あたし達は食堂の外に出る。

騒ぎを聞きつけたのか、今まで他の場所にいた生徒達も一斉に階段を登つて、食堂に向つて来た。

「食堂でケンカだつて。」

「人が殺されたつて……。」

「加害者は凶器を持つてるらしいぞ……。」

階段を下りていくあたし達とすれ違う生徒達の、緊迫した囁き声が聞こえた。

どうしよう……。

すごい大事になっちゃった……。

しかも、話に尾ひれがついてる。

リュウ兄、逮捕されるかも……。

あたしのせいで！

「気にすんな、桃子！とにかく車まで走れ！絶対逃げ切るぞ、いいな！」

立ち止まりそうなあたしの手を引っ張る力を緩めず、リュウ兄は怒鳴った。

あたし達は人の波に逆らいながら、校門に向って走り続けた。

第17話

校門を抜け、あたし達は学校から少し離れたコインパーキングに辿り着いた。

朝、あたし達はここに車を留めて、大学に向ったんだ。

リュウ兄が精算してる間、運動不足でコレステロール値も高いあたしは、アスファルトに座り込んでゼエゼエ肺の奥から息をした。

リュウ兄の行動は迅速だった。

助手席のドアを開けると、まだヒューヒュー言っているあたしをグイグイ押し込み、自分もさっさと運転席に乗り込むと、エンジンをかける。

「飛ばすぞ、ベルトしとけよ。」

言うや否や、リュウ兄はアクセルを踏み込み、ハンドルを切った。その勢いで、あたしは顔から窓ガラスにベタッと押し付けられる。

エンジン全開で駐車場から飛び出した車は、車道に出るとドリフトをして向きを変えた。

キキキーとタイヤは悲鳴を上げ、ノロノロ歩いていた通行人が飛びのいて道をあける。

な、なにもここから飛ばさなくてもいいでしょ！

あたしは泣きそうになってベルトに掴まった

あたしの呼吸が何とか収まった頃、車は国道一号線に入った。

まだ免許を取ってないあたしには、どっちに向ってるのかもさっぱり分からない。

「あー！気持ち良かった！久々に人殴ったぜ！」

突然、高笑いしながらリュウ兄ちゃんが叫んだ。

あたしは恨めしそうな顔をして、その横顔を睨む。

「気持ち良かった、じゃないでしょ！嘘つき！最初からケンカするつもりだったんだね！」

ポカポカ殴りかかるあたしの手を、リュウ兄は運転しながら左手で器用に遮る。

「当たたりめえじゃん。俺は不良だからな。でも、あんな弱い奴とやったの初めてだ。もっとやるときや良かった。」

「何言ってるのー！逮捕されちゃうよ！被害届けでも出されたら・・・。」

あたしの言葉にリュウ兄はおかしそうに笑った。

「分かってるって。俺は経験者だからな。まあ、出すに決まってるよ。大学の物もかなり壊したしな。だから明日出頭する。」

「え・・・？」

あたしはその言葉に青くなった。

今更ながら、彼がしたことの重大さに気付いた。

「・・・警察に行くってこと？」

「行くよ。自首する。ただし、明日な。今日は逃げ切るぞ。」

ハハハとリュウ兄は高らかに笑う。

何が可笑しいの？

自首したら、逮捕されちゃうじゃん！

「やだよ。リュウ兄はあたしの為にやったんだもん。そりゃ、ケン力はまずかったけど、元はと言えば佐藤先輩があたしを・・・。」

「桃子！」

言いかけたあたしをリュウ兄が制した。

「お前は関係ないからな。何も言わなくていい。俺が勝手に手を出したんだから。大丈夫、警察は慣れてる。」

慣れてるって、補導されてたのはまだ未成年の時じゃん。

社会人になってから逮捕されたら刑務所じゃないの？

あたしの気を知ってか知らずか、リュウ兄は涼しい顔をして窓を開けると、タバコに火をつけた。

煙と一緒に外の風が吹き込んできて、あたしの髪が四方になびいた。

「バカ・・・。リュウ兄ちゃんのバカ・・・！」

黙り込んだあたしを見て、リュウ兄は言った。

「なあ、桃子。今から海行かねえ？」

「はあ？何、呑気な事言ってるのよ？」

突然の提案にあたしの声がひっくり返る。

リュウ兄は楽しそうに、笑いながら続ける。

「いーじゃん。俺、この街嫌いなんだよ。工場ばっかでゴタゴタしててさ。なあ、海行こうぜ。」

「そ、それどこじゃないでしょ？逮捕は？」

「だから、今日だけ。執行猶予だ。今までのモデル料の代わりに俺に付き合え。」

リュウ兄はアクセルを踏み込む。

その時、気が付いた。

車のナビゲーターは既に海に向って南下するルートを示している。

目的地まで設定されている。

到着予定時刻 13:30

目的地は伊良湖岬。

あたしはやつと理解した。

ここまで、リュウ兄は計画済みだったんだ。

逮捕覚悟で暴れた後、海で最後の時を過ごして、翌日自首。

最初から、刑務所に入る事まで予定に入ってるんだ。

あたしのために……！

こぼれる涙はもう止めようがなかった。

しゃくり上げて泣き出したあたしの頭を、リュウ兄の左手がクシャクシャなでる。

「泣くなよ、バーカ。今日はお前は俺の彼女だ、いいな。」

リュウ兄は可笑しそうに笑ってハンドルを切った。

第18話

ナビの到着予定時刻ピッタリに、あたし達は海が見えるパーキングに到着した。

そこはフェリーの波止場だった。

平日だけに人もまばらで、閑散としている。

あたし達は車を降りて、堤防に激しく打ち寄せる波を呆然と眺めた。潮風が鼻について、ドーンという海鳴りがお腹に響いてくる。

海に来たのなんて何年ぶりだろう。

子供の頃、まだお父さんがいた頃は毎年来てたような・・・。

そう言えば、何となくこの風景に見覚えがある。

「桃子、覚えてる？ここからフェリーで、どっかの島に行ったの。

親父がまだいて、かあさんと、俺とお前がいてさ。多分あれが、最後だったかなあ・・・。」

遠い目をしてリュウ兄はタバコの煙を吐き出した。

何となく、その記憶は残ってる。

多分、あたしが6歳くらいだったかな。

リュウ兄もまだ、不良じゃなかった。

どちらかと言えば、大人しい男の子だった気がする。

あたしもまだ、こんなに太ってなかったし、普通の女の子だった。

「俺さ、あの時、楽しかったんだ。まさか、あの後、離婚するとは思ってなかったからな。」

自嘲的に言って、リュウ兄は笑った。
そっか。

ここは幼かったリュウ兄の思い出の場所なんだ。
あたしは小さかったから、お父さんのことも離婚したこともあまり
記憶に残ってない。

でも、小学生だったリュウ兄には辛い思い出だったに違いない。

最後に見たかったんだね。

楽しかった子供の時みたいにな、この景色をもう一度。

「また、来ようよ。お母さんも連れて。ね？」

あたしはリュウ兄の腕に巻きついた。

「うん。そうだな。またいつか来れるといいな。」

嬉しそうに、でも悲しげに笑ってリュウ兄はあたしを見た。

今度はいつ来れるのかなんて、あたし達には何の確信もなかった。

「なあ、桃子。俺のこと怖いかな？」

唐突にリュウ兄は、言った。

あたしは意味が分からず、腕に巻きついたまま彼の顔を見上げる。

「何で？怖くなんか・・・。」

言いかけた時、リュウ兄のもう片方の腕があたしを捕まえた。

あたしはあつと言う間に、二本の逞しい腕に挟まれてリュウ兄の胸
の中に収まってしまった。

あたしの顔が彼の胸にギュッと押し付けられる。

「な、な、何すんの・・・！？リュウ兄ちゃん！」

突然の抱擁に、あたしは悲鳴を上げた。

体は無意識に反応する。

思わず伸ばしたあたしの腕は、リュウ兄の顎にアッパーを喰らわした。

怖い。

また吐きそう・・・。

腕からすっぱ抜けたあたしを見て、リュウ兄は顎を押さえて苦笑した。

「俺が怖い？男だから？」

「こ、怖い！触られるのがダメ。触るのは大丈夫なのに・・・。変だね。被さってくる感じがヤダ・・・。」

上手くこの感情を表現することができなくて、あたしはしどろもどろに言い訳した。

リュウ兄は気を害した風もなく、笑みを見せる。

「じゃあさ、お前がやれよ。」

「は？何をですか？」

「触られるのが嫌なんだろう？だったら、お前が俺に触ってくれる？」
「えええ？」

ほらっと言って、リュウ兄は体を屈めた。

変な気持ちだった。

すごく胸がドキドキしてる。

あたしは言われるまま、彼に近づき、彼の頬に触れた。

彼は少しくすぐったそうに、首を傾げて目を伏せる。

何だか、大きな犬に触ってるみたいだ。

そして、短い髪に触れ、首筋をなぞり、シャツの上から逞しい胸に触れる。

その手に彼の心臓の音が跳ね返るように伝わってくる。

「・・・ときどきいつてる・・・。」

「男も怖いんだよ。お前だけが怖いんじゃない。だから心配すんな。」

リュウ兄は笑っていうと、あたしの手を握って歩き出した。

何、これ・・・。

あたし、ときどきしてる。

彼の分厚い胸の感触が、掌に残ってる。

あたしの為に自分の全てを曝け出してくれた人。

闘ってくれた人。

そして、明日あたしの為に全てを失ってしまう人。

あたしは、リュウ兄ちゃんに何をしてあげられるんだろう・・・。

力強い手に引つ張られながら、あたしは目の前を歩く大きな背中に問いかけていた。

第19話

それから、あたし達は白い砂浜を歩いた。

目の前に広がる大海原を見ると、自分達の儚さを感じる。

シーズンオフの平日の海に人影はなく、あたし達はこの世で二人つきりになった漂流者みたいだ。

広がる大空に続く水平線。

すごい開放感。

目の前に何も無いことが、こんなに美しくて心もとない。

「同じ県なのに、内陸側は損してる感じだな。俺もこっち側に生まれなかった。」

リュウ兄は舌打ちした。

「しょうがないじゃん。海がない県もあるんだから、我慢しなくちゃ。」

あたしも慰めにもならない事を言った。

「リュウ兄ちゃん、これからどうするの？」

グイグイと手を引っ張られて、ここまで歩いて来たけど。

車もさっきの波止場のパーキングに置きっ放しだ。

まさか、ここで心中する気じゃないよね・・・？

少し不安になったあたしは、恐る恐る聞いてみる。

あたしの心を見透かすように、彼は振り向いてニヤッと笑った。

「俺とここで死んでくれる？」

「・・・え？」

あたしは一瞬凍りついた。

でも、自分でも驚くほどに答えは決まっていた。

「いいよ。リュウ兄と一緒になら。」

あたしの答えに今度はリュウ兄が凍りつく。

一瞬、強張った顔がすぐに緩んで、彼はあたしの頭をクシヤクシヤなでた。

嬉しかったのかな？

バーカ、と言って笑うと、彼はまたあたしの手を引っ張って歩き出した。

やがて、あたし達の目の前に真つ白な要塞みたいな巨大建造物が姿を現した。

リゾートホテルだ。

椰子の木や、棕櫚の木の並木が南国の雰囲気を感じさせる。

テニスコートやプールが敷地内にある。

セレブ専用本格リゾートホテルじゃないの？ここ。

見るからにお金がかかりそうだ。

リュウ兄はホテルのエントランスに続く並木の歩道を、どんどん歩いていく。

慣れない場所にオドオドし始めたあたしをグイグイ引っ張って、リュウ兄はロビーに入っていく。

南国風のロビーには、小さな滝がついた小川が流れていて、せせらぎの音が涼しげだ。

どういう仕掛けでホテル内で川が流れるのか、よく分からないけど。エスニックな藤細工のソファや、照明器具をあたしはもの珍しげに眺めた。

レセプションでキッチリおでこを出して髪をアップに纏めた女性従業員に、リュウ兄は声を掛ける。

「予約しました藤井ですけど。」

女性はカウンターでリストに一瞥してから、あたし達を見てにっこり笑った。

「藤井隆一様、桃子様ご夫妻ですね。お待ちしておりました。最上階のスイートルームお取りしております。今からチェックインできますので、こちらの用紙にご記入をお願いします。」

あたしは思わず吹き出しそうになり、慌てて口を押さえた。

リュウ兄の脇腹を突付いて聞こえないように囁く。

（あたし達、夫婦になってるじゃん。）

（そう言った覚えはねえけど、苗字が同じなんだからしょうがねえだろ。今更、否定するのも面倒だしな。）

リュウ兄も苦笑いしながら言った。

簡単な用紙に記入し終わると、あたし達は鍵を持ったクラークにおもむろに最上階まで案内された。

ある一室の前で、クラークは鍵を開け、あたし達を中に入るよう促した。

だだっ広い部屋にキングサイズのベッド、ジャグジー付きのバスルームからは太平洋が一望できる。

間違いない。

一晚、10万円コースだ・・・。

新婚さんが一生に一度の記念に泊まるところじゃないの？

彼が何を考えてるのか、あたしにはもう理解不能だった。

クラークはマニュアル通りの説明を一通り終わると、うやうやしく頭を下げ、部屋から出て行った。

リュウ兄は鍵を閉めると、子供みたいに窓に張り付いて、眼下に広がる太平洋を眺めた。

「すげーじゃん。おい、桃子。風呂入ろうぜ。風呂。海が見える露天風呂だぞ。」

はしゃいで早々とパーカーを脱ぎ始めるリュウ兄を、あたしは困惑して見つめる。

「ここ、高いんじゃない？大丈夫？」

「今まで金使った事ないんだから、たまにはいいだろ？刑務所入ったらしばらく金使わないし、だったら今しかないだろ？」

あたしの返事も待たずに、自問自答しながら、さつさと服を脱ぎ始める。

なんで、脱衣所で脱がないの・・・。

きつと、モデル体験のせいで、あたしの前で裸になるのに抵抗がなくなってしまうんだ。

それには少し罪悪感を感じるけど。

「お前も入れよ。」

素っ裸になって、タオルを掴むとリュウ兄は軽く言った。

「い・や・で・すうう！後から一人で入るもん！」

「何で？いいじゃん。バスタオル巻いて入れば？」

「やだよ！恥ずかしいもん。」

リュウ兄は呆れた顔で、あたしを見下ろす。

「お前、人の陰毛まで写生しといて、今更よく言うね。恥ずかしい

のはこつちだつてんだよ。」

「そつそれは、芸術の為だから別の話です！あたしが恥ずかしいのは……。」

「分かった！自分が太ってるから？」

あたしは手に持ってたスケッチブック入りのカバンを、リュウ兄目掛けて振り回した。

「ほつといてよ！どうせあたしはデブですよおだ！」

ハハハ・・・と高らかに彼は笑った。

「別に興味ねえよ。いいじゃん、タオル巻いて入ったら？」

あたしの返事も待たずに、バスタオルを投げて寄越すとリュウ兄はさっさとバスルームに入ってしまった。

何なのよお。

この異常なハイテンション。

今日のあたしはリュウ兄に振り回されっぱなしだ。

次は無いと思うから、必死で楽しんでるのかもしれないけど。

あたしはタオルをギュッと抱きしめた。

しょうがない。

今日は振り回されてやるか。

あたしは覚悟を決めてバスルームに入った。

第20話

温泉レポートをする女子アナさながらにバスタオルを巻き付けて、湯気で真っ白に曇ったバスルームにあたしは入った。

本物の大理石なのかな？

ローマ時代のお風呂みたいに真っ白な石でできたバスタブ。壁にはテレビの泉よろしく彫刻が施されており、滝のようなお湯が贅沢に流れ落ちている。

リュウ兄はその彫刻に引けを取らない肉体美をさらして、子供みたいに窓に張り付いて海を眺めている。

美しいアポロン像が野次馬みたいなカッコでガラスに張り付いてるのは変な光景だ。

あたしは彼が振り向く前に急いで湯船に浸かった。

これで、安心。

リュウ兄の裸は見ちゃっても、あたしのこのお肉は絶対に見せないんだから。

鼻から上だけ出したカップパみたいに湯船に潜んでいるあたしを見て、リュウ兄はザブザブと飛沫を飛ばして近づいてきた。

「興味ねえから見ないって。でも、別にいいじゃん。昔は一緒に入ってたんだから。」

「・・・リュウ兄には分かんないよ。あたし、太ってるし。」

ぶくぶく泡を吐き出しながら、あたしはお湯の中で話す。

絶対に見せるもんか、あたしのお肉。

「気にしてたのか？だったら痩せれば？」

「無理！子供の頃からこんなだもん。しかもあたし、お母さんとそっくりじゃん。遺伝だよお・・・。」

リュウ兄は苦笑しながら、あたしが湯かっている反対側の縁に体をもたれ掛けた。

あたしは、さっきから気になって仕方なかったことをおずおずと口にする。

「ねえ、スイートって高いんじゃないの？」

「分かんねえ。金額見ないで適当に予約したから。」

気持ち良さそうに目を瞑ったまま、リュウ兄は面倒くさそうに答える。

「それがビックリだよ。いつから予約してたの？」

「少し前。してなきゃ、こんなお堅いトコ突然入れてくれねえよ。ラブホじゃないんだから。」

それはそうだ。

やっぱり、喧嘩も、ここに来る事も、明日出頭して、刑務所に入ることも全部計算の上でのことなんだ。

あたしは、せつなくなつた。

黙ってしまったあたしを気遣うようにリュウ兄は明るく言った。

「お前は関係ねえよ。最近、女と別れて金使ってなかったから、ムシヨ入る前に贅沢しとこうって思ってたんだ。」

その言葉にあたしは再びビックリした。

「リュウ兄、彼女いたの？」

「・・・どういう意味だよ？いたら悪いか？」

「悪くないけど・・・意外。」

心底驚いて、あたしは呆気にとられる。

どんな物好きな人が、リュウ兄と付き合ってたんだろ。

格闘技のファンだったのかな。

リュウ兄は自嘲的な笑みを浮かべた。

「俺が高校3年の時、ツレの紹介で付き合いだしたコだったんだ。

今、名古屋の女子大の4年生かな。この前、お前んちでチョコケ―

キ食った時、あの日に別れた。」

「え！知らなかった。リュウ兄がフラれたの？」

思わず口から出たあたしの言葉に、リュウ兄は両手で水鉄砲を作るとあたしに放射した。

「そうだよ。オレがフラれたの。よく分かったな。」

「何で？」

考え込むようにリュウ兄は濡れた頭を掻きながら、ゆっくり話す。

「・・・彼女が大学に入ってから、なんか変っちゃって・・・俺も仕事で忙しかったし・・・俺のことは好きだけど、もっと広い世界に行きたいとか、飛びたいとか言い出して・・・理由は色々あったんだろけど・・・結局、何が悪かったのか、いまだに分かんねえ・・・。」

問題に答えられない子供みたいにリュウ兄は一生懸命考えながら、言葉を探している。

単純で純粋なリュウ兄ちゃんには多分、分からないだろう。でも・・・。

「あたし、なんかその人の気持ち分かるよ。」

あたしの言葉に今度はリュウ兄が反応する。

「何が？」

「リュウ兄、女の子は進化するんだよ。色んな場所に行つて、生活が変わつて、どんどん夢が増えて、変つていくの。」

その人は大学に入つて変つたかもしれない。でも、新しい環境で、新しい夢を見つけたんだと思う。それはリュウ兄のこと好きだったこととは関係ないんだよ。リュウ兄のことは好きだったけど、それよりもっと大きな何かを見つけて、追っかけたいんだと思う。」

リュウ兄は神妙な顔であたしの話を聞いていた。

「・・・俺は、工場で安月給で働いてる俺なんかより、誰か他に見つけたんだと思つてた・・・。」

弱気な顔で途切れ途切れに話すリュウ兄は、まるで言い訳をする子供みたいだ。

あたしはその純粋な顔が愛しかった。

「絶対、リュウ兄のことは好きだったと思う。だって、高校の時から付き合つてたんでしょ？暴力団みたいだった頃のリュウ兄と付き合つてたんだから、タダ者じゃないよ、その人。見かけはチンピラでも本当は優しいリュウ兄の本質を見抜いてた人だよ。きっと、今でも・・・。」

バチャッ！

励まそうと思つて力説したあたしの顔にお湯が飛んでくる。

手に洗面器を掴んだアポロン像さながらに、リュウ兄は飛沫を上げて立ち上がった。

「お前なあ、暴力団とかチンピラとか言いたい事言いやがつて！褒めてんのか、貶してんのか、どっちかにしろ！」

リュウ兄は洗面器に入れたお湯をあたしに向つてドバッと撒き散らした。

「やだあ！暴力反対！」

キヤーキヤー叫びながら、あたしはタオルがズリ落ちないように胸を押さえて逃げ回る。

あたし達は子供みたいに湯船の中で暴れまわった。

こんな時がずっと続けばいいのに。

本当に明日で終わりなんだろうか。

このまま時が止まってくれるなら、あたしは何だってするだろう・・。

泣き笑いの顔を見せないように、あたしはお湯を顔にかけ続けてた。

第21話

リュウ兄ちゃんを先にバスルームから追い出した後、あたしは脱衣所に出てホテルに常備されていたバスローブを巻きつけた。

高級感のある厚手のタオル生地が肌に気持ちいい。

鏡を見ると、バスローブでモコモコになったあたしはまるで関取だのぼせてピンク色の顔になった顔が白いバスローブの上に乗って、

紅白羽二重餅みたい。

もう、いいけどね。

今更、痩せたってしょうがないし。

バスルームから出た時、時刻はまさに夕暮れ時だった。

窓の外に広がる海は、ちょうど太陽が沈むところで、大海原をオレンジ色に染めている。

リュウ兄は広いベッドに裸のまま寝そべって、頬杖ついて海を眺めていた。

もう服を着る気はないらしい。

部屋の中に差し込む夕日は、彼の美しい体を照らし、彫刻みたいな陰影を作っている。

突如、あたしの頭にイメージが浮かんだ。

あ、今だ。

今、描きたい！

この人の体。

あたしは唐突に思いつき、カバンの中からスケッチブックと筆箱を

引っ張り出した。

「あれ、桃子いつ出たの？」

のんびり話しかけるリュウ兄には目もくれず、ふかふかしたソファにドスンと座ると、あたしはスケッチブックを広げ、鉛筆を走らせた。

今しか描けない。

夕日に照らされたアポロン。

この綺麗な体はきつと今この瞬間にしか描けない。

あたし達には、もう明日はないんだから。

鬼気迫る形相で突如スケッチを始めたあたしを、リュウ兄は黙って見つめていた。

早く、描かなきゃ。

今しかない、という強烈な焦燥感にあたしは突然駆られた。

幸せな一時を人はカメラやビデオに収めようとする。

あたしにとって、その媒体が絵だった。

この幸せな今を、描く事であたしは閉じ込めようとしたかった。

描きとめたって、時間を閉じ込めることなんてできないのに……。分かってたけど、あたしは無我夢中で彼を描き続けた。時々、目の前がぼやけて霞む。

自分の涙だと気付いたのは、頬に伝って、スケッチブックにポタポタと落ちた時だった。

やだ、やだ、やだ・・・！

リュウ兄ちゃんが刑務所いくなんで・・・。

ずっと近くにいて！

あたしを一人にしないで！

声にならない嗚咽を繰り返しながら、あたしはひたすら鉛筆を走らせた。

一枚の、夕日に照らされたアポロンの絵が完成した時、あたしはスケッチブックを手から落として号泣した。

「桃子、泣くなよ。」

床に落としたスケッチブックを拾い上げながら、リュウ兄は笑ってあたしの頭をなでた。

パラパラとそれをめくりながら、へえ、と溜息をつく。

「上手くなったな。初めて見たときも上手かったけど、なんかレベルが上がってる。躍動感つうの？上手く言えないけど、生きてるみたいだ。」

その言葉にあたしは、びっくりして彼を見上げた。

「分かるの？リュウ兄。」

うーん、と眉間にしわ寄せて、彼は考える。

「芸術は分かんないけど、なんかこの絵が生きてるみたいなのは感じる。俺がかっこいいからかな？」

ハハハと胸を張ってリュウ兄は笑った。

あたしは、その時、電気が走ったようなすごい衝撃を受けていた。少し、分かったんだ。

あたしの作品に足りなかったもの。

それは生きてる力。

リアルで生なましいものが、あたしの作品にはなかった。

あたしは、自分の中で作られた偶像ばかり追っかけ、空想の世界に逃げて、現実を描く事ができなかったんだ。

それは、あたしが逃げてたから？

あの時の恐怖で目を開く事ができなかったから？

ソファにへたり込んだあたしを、リュウ兄は面白そうに眺めていた。

「泣いたり、怒ったり、呆けたり、ヘンなヤツ。」

ハタと我に返り、あたしはリュウ兄の手を掴んだ。

「リュウ兄、分かったよ。あたしに足りなかったもの。」

突然、手を掴んで真剣な顔をして語るあたしを、リュウ兄は気味悪そうに見た。

「ああ、そう。何？」

「リアリティよ。エネルギー。体温。まさに躍動感だよ。生きてる感じだよ。あたしが今まで死んでたから、見ようとしなかったから、描けなかったんだと思うの。」

興奮して話すあたしをリュウ兄は少し怖そうに見て、苦笑いする。

「・・・ごめん。意味分かんねえ。」

「いいの。あたしには分かったの。次の作品はきつとイけるよ！」

「ああ、そう。頑張つて。」

勢いよく立ち上がったあたしを見上げて、リュウ兄は適当に受け流した。

太陽が沈んで、窓の外は夕闇が広がった。
あたし達はソファに並んで座って、ただ、ぼんやりを海の色が変わっていく様を眺めていた。

時が一刻一刻と過ぎていくのが、視覚によって分かるのは残酷なことだ。

執行猶予の時間が目に見えて失われていくのだから。

「なあ、桃子。」

先に口を開いたのは、リュウ兄だった。

「俺がいなくなったらさ……。」

それを聞いて、あたしはドキっとした。

「……何？」

「……いなくなっても、ちゃんと大学行けよ。その……お前は当たりが悪かったよ。男って、あんなヤツばかりじゃないから……怖くないから。だから、元気出せ。お前にはまだ未来がある。」

まだ湿った髪をグシャグシャ搔いて、リュウ兄はボソボソと言った。
慰めてくれてるらしい。

口下手なリュウ兄の精一杯の言葉を、あたしは心に受け止めた。

「ありがとう。ありがとう、リュウ兄。」

あたしは本当に嬉しかったんだ。

どうしたらこの気持ち伝えられる？

あたしはリュウ兄に何をしてあげられる？

この人の無償の愛にあたしは何を支払う事ができるのかな？

それは本当に無意識の行動だった。

あたしは隣に座っていた彼の首に両腕を回して、広い胸に飛び込ん

だ。

抱きとめてくれると思ったリュウ兄の体は、あたしの体の重みでそのままソファに押し倒される。

あたしの下敷きになった彼の体はフカフカのソファに半分埋まって動けなくなった。

「・・・お前な。」

「・・・ごめん。」

「そう思ったら痩せるよ。重いんだよ！」

「あ、ひどい！それ言うの反則じゃん！」

リュウ兄は心底可笑しそうに笑い出した。

「もー！何が面白いの？あたし、真剣だったのに・・・。」

そう言いかけた時、彼の両腕が背中に回され、あたしは彼の胸に押し付けられた。

あ、それは・・・ダメ・・・。

怖い・・・！

「怖くないから。目、閉じてろよ。」

彼はそう言っ、あたしの顔を両手で手繰り寄せると唇を重ねた。

それは、あたしのファーストキスだった。

第21話（後書き）

次回、R18指定です。

好きな方はお楽しみに。

苦手な方は、飛ばして下さいね。

第22話

リュウ兄ちゃんの胸の上であたしは抱きしめられたまま、彼のキスを必死で受け止めた。

微かに感じるタバコの匂い。

無意識に強張っていくあたしの背中を、怯えた犬を落ち着かせるようにリュウ兄はゴシゴシさする。

「力抜けよ……。怖くないから。」

言われた通りに必死で目を瞑っているあたしの唇に、彼の唇の感触が伝わる。

やがて、濡れた温かいものがあたしの唇を押し開け、侵入してきた。

ちよ、ちよっとリュウ兄ちゃん……！

あたしがパニくってる間にも、彼の舌はあたしの舌を絡めていく。不思議な事にあんなに緊張して強張っていたあたしの体から、今度は力が抜けていく。

完全に脱力した時、リュウ兄の両腕はあたしを解放した。

起き上がる力も出なくって、あたしはそのまま彼の胸の上に打ち上げられたアザラシみたいに載っていた。

休むことなくリュウ兄の手は優しく、あたしの背中をさすってくれる。

その温かさと優しさに、あたしは胸が締め付けられた。

ぼろぼろ溢れてきた涙があたしの頬を伝って、リュウ兄の裸の胸にポタポタ落ちる。

彼はあたしをもう一度抱きしめ、手繰り寄せると、あたしの顔にキスしながら涙を舐め取った。
まるで母犬が子犬を慈しむみたいに。

どうしよう。

この人が好き。

大好き・・・！

「・・・リュウ兄・・・」

「・・・何？」

「今日はリュウ兄はあたしの彼氏なんだよね。」

「ああ。」

「・・・お願いして・・・いいのかな？」

あたしは爆発しそうに赤面してやっとそこまで言った。

リュウ兄は優しい顔であたしを見てる。

もう分かってるんだ。

あたしのお願ひ。

返事の代わりに、彼の大きな手はあたしの髪をすくい、首筋を触り、頬をなでる。

初めて感じる体の奥からやってくる大きな波の予感。

あたしの呼吸が乱れてくる。

どうしよう。

ふいにリュウ兄は立ち上がった。

アザラシみたいにソファに転がるあたしの体の下に、両腕を差し入れガバッと持ち上げる。

うわ！

お姫様だっこだ！

あたしは感激した。

あたしを持ち上げる彼の両腕は筋肉が盛り上がり、張り詰め、ものすごい負担がかかっているのが分かる。

「ベンチプレス60Kgだな。」

「ごめん……。65Kgだよ。」

申し訳なさそうに訂正したあたしを見て、リュウ兄は笑う。

「ジムで100Kgまで上げた事あるから、大丈夫だよ。」

あたしをお姫様みたいに横抱きしたまま、リュウ兄はベッドに向けてゆっくり歩いていく。

弾力のあるベッドの上に、そっとあたしを横たえると彼も並んで横になった。

お互い向かい合った姿勢になってから、彼はあたしの頬に手を伸ばした。

少し戸惑った顔で、彼は口を開く。

「俺でいい？」

「……。うん。」

「俺、兄貴だけど？」

「いいの……。リュウ兄がいいの！お願い……。」

あたしの返事にリュウ兄は少し笑みを浮かべてから、真面目な顔になった。

リュウ兄も緊張してるんだ。

その時、あたしには分かった。

あたしの初めての体験は残念だけど、悲惨な思い出となってしまった。

この過去の記憶を塗り替えることができるのは、もうこの人しかないんだ。

リュウ兄はもう一度あたしを抱き寄せ、唇を重ねた。
濃厚な、でも、優しいキスだった。

右腕であたしの頭を抱きながら、彼のもう一方の手はあたしの着ていたバスローブの中に侵入する。

温かい、大きな手があたしの体をゆっくり滑っていく。

やがて、今まで誰にも触れられたことのなかった大切な部分に指が触れた時、あたしは思わず声を上げた。

その声の大きさに一瞬、彼の手は動きを止める。

それがあたしの喜びの声だったのを確認した後、再び指は動き始めた。

敏感な部分に絶妙な刺激を感じて、あたしは耐えられず、リュウ兄の首にしがみ付く。

その刺激は小さなさざ波となり、大きなうねりとなって、あたしの体全体に襲い掛かる。

「あ、や、あ・・・！」

頭が真っ白になるような突き上げてくる快感に、あたしは泣きながら彼の背中に爪を立てた。

首にしがみ付いたあたしの耳元に、彼の息がかかる。

「桃子・・・桃子・・・」

最後の快感が突き抜けるその瞬間まで、リュウ兄はあたしの名を呼びながら、抱きしめていてくれた。

自分がどうして泣いているのか、もう訳わかんない。

あたしは痙攣する体をリュウ兄の胸に委ね、ただ泣き続けた。

リュウ兄は終始無言だった。

あたしの体の痙攣が治まるのを待って、再び、優しいキスを体中に撒き散らす。

あたしの唇に触れた後、首に舌を這わせ、胸の敏感な部分を噛み、そしてさっきまで指が蠢いていた場所を開くとそこにもそつと舌を這わす。

真っ白になっていく頭。

こみ上げてくる快感。

あたしは両手で顔を覆って、それに耐えながらまた泣いた。

「桃子、やめるなら今だけど？」

低い声で吐息みたいにリュウ兄は耳に囁く。

「や、やめるの・・・？」

激しくなった呼吸の下で、あたしは喘ぎながら絶望の声を出した。
あたしの声に彼は溜息みたいに小さく笑った。

「だから、聞いている。これ以上したらやめれなくなりそうだ。」

「やだ・・・やめないでよ・・・。」

「俺、兄貴だよ？」

真面目な顔で彼は問いかける。
あたしは泣きながら懇願した。

「リュウ兄が好きなの！お願い！もっと来てよ・・・！もっと近くまで・・・。」

彼は少し笑ってあたしを見下ろした。
それが応えだった。

彼はあたしの足を持ち上げキスすると、優雅な仕草で自分の肩に乗せ、言った。

「了解。」

何て表現したらいい？

大好きな人と一つになったその瞬間。

ものすごい痛みと、それを上回って突き上げてくる快感。
あたしは彼に身を委ねてただ泣き続けていた。

第23話

朝の光の中であたしは目を覚ました。

部屋の時計は6時を指している。

窓の外に広がる太平洋が朝日を受けて銀色に輝いているのが見えた。

そして。

あたしの目の前には、まだ眠っている彼の浅黒い体があった。

あたしを胸に抱きしめたまま、腕枕で寝てくれたんだ。

触れ合う素肌に、彼の体温を感じる。

子供みたいに寝息を立てている彼の唇に、あたしはそつと口付けた。

閉じられていたリュウ兄の細い切れ長の目が薄く開いた。

あたしは慌てて顔を離して寝たフリをする。

それに気が付いた彼の腕があたしの体を抱き寄せた。

「起きてんのか？」

気だるい、寝起きの低い声がセクシーだ。

あたしは、何だか気恥ずかしくって目を瞑った。

「・・・寝てます。」

「ああ、そう。」

あたしのポチャポチャした首に、彼は突然、歯を立ててキスをした。

「いたたた！痛いよ！リュウ兄！」

逃げようとするあたしを彼の腕は素早く抱え込み、抱きしめる。

あたしの顔を手繰り寄せると、今度は唇にキスをする。

彼の温かい手があたしの胸を包み込み、体が溶けていく感覚にあた

しはまた脱力してしまう。

「お前さ、綺麗だよ。」

突然、リュウ兄は言った。

「な、何言ってるの？急に？」

あたしは聞きなれないその台詞に動揺して、赤面した。

彼は上を見て、うーん、と考える。

「俺、お前の甲高いアニメ声とか苦手だったんだけどさ。昨日、それ聞いて結構興奮した。太って肉の感触が気持ちいいし、肌綺麗だし、色白デブって結構好みかも・・・。」

彼が言い終わる前に、あたしは枕を掴んで立ち上がった。

「アニメ声の色白デブで悪かったわね！褒めてんのか、貶してんのかどっちなにしてよ！」

「褒めてるって！おい、暴力反対だろ！」

枕は横になっているリュウ兄の顔を直撃した。

ベッドでひとしきり暴れた後、あたし達は昨日から全く食事をしないでいたことを思い出した。

「朝は食堂で朝食バイキングがあるって。それとも、ルームサービス頼む？」

ベッドに備え付けてあるホテルの案内パンフレットをパラパラ開いてリュウ兄は聞いた。

お腹は減っている。

猛烈に。

だけど、この部屋から出た瞬間、あたし達の前には現実が立ちのびかけている気がした。

リュウ兄は今日出頭するんだ。

朝が来たのがこんなに早かったのが悔やまれる。

何で、寝ちゃったんだろう。

黙っているあたしをリュウ兄は後ろから抱きしめた。

「まず、風呂入る？」

「・・・うん。」

「朝食はルームサービスでいい？」

「・・・うん。」

「泣くなよ。」

「・・・うん。」

あたしはポロポロ涙を落として既に号泣モードに入っていた。

「俺は大丈夫だから心配するな。警察は慣れてるよ。」

耳元で笑いながらリュウ兄は囁いた。

朝日に照らされた海を見ながら、あたしはバスルームのガラス戸を開けた。

潮風が一気に入ってきてお風呂の中の蒸気を飛ばす。
なるほど。

こうやってガラス戸を開放してお風呂に入れば露天風呂になるんだ。
潮風を感じながら、朝日でキラキラ光る湯船に入るのは最高だ。

そしてあたしの横には、美しいアポロン。

何て贅沢なんだろう。

「今から、メシ食って、それからお前の学生寮に戻るからな。そして、俺、行くよ。」

リュウ兄は何てこともなさそうに、顔をタオルでこすりながら言った。

でも、あたしは恐れていたその言葉に体を硬くする。

「あ、あたしも行くよ、警察。」

「バーカ、来んなよ。かつこ悪いじゃん。手錠とか掛けられたら俺でもちよつとヘコむかもしれないし、人に見せたくねえよ。」

手錠……。

あたしの脳裏に刑事ドラマで見た、面会シーンが浮かぶ。

パジャマみたいな白いシャツとズボンで、後ろに回された手に手錠をかけられ歩かされる犯罪者。

大学生に対する傷害罪で逮捕された会社員 藤井隆一 容疑者23歳・

……

ニュースのテロップはきつとこんな感じだ。

あたしはその現実を受け止める自信はなかった。

「嫌だよ。やつぱり、嫌！リユウ兄ちゃん、あたしと逃げよう。」

半分泣き出して、あたしは彼の胸に縋り付いた。

彼は黙って、あたしの髪を触る。

あたしを悟らすように、そして自分に言い聞かせるみたいに彼はゆっくり言った。

「俺は人生諦めてないんだ。

わざわざ出頭するのは少しでも早く刑を終わらせたいからだよ。

死んではないだろうけど、ヤツがどの程度怪我したか分かんないし。

示談じゃ済まないだろうからな。

嫌な事は早く済ませたほうがいい。

お前は……気にしなくていいから。

待っててくれたら嬉しいけど……。」

いい終わる前に、あたしは彼の首に両腕を巻きつけ、キスで唇を塞

いだ。

無理矢理、舌を入れ、彼の下半身に手を伸ばす。

「・・・おい、ちょっと・・・。」

驚いた顔で彼は細い切れ長の目を見開いた。

「待つてる。ずっと待つてる。だから、戻ってきて！あたしのところに・・・！」

願わくは、あたしを忘れないで、すぐに戻ってきますように・・・。
あたし達は潮風を感じながら、最後にもう一度愛し合った。

第24話

バスルームから出ると、部屋の前には既に朝食が載ったワゴンが置いてあった。

バスローブを巻いてまだぼんやりベッドに座り込んでいるあたしをよそに、リュウ兄は昨日脱ぎ捨てた自分の服をかき集め始める。

さっさと体を拭いてジーパンとシャツに着替えると、ソファに座ってワゴンに載ってたロールパンを掴んで食べ始めた。

完全にいつものリュウ兄ちゃんに戻ってる・・・。

さっきまでのセクシーなアポロンはなりを潜めて、いつもの無愛想な元ヤンのリュウ兄だ。

あたしはホッとしたような、寂しいような複雑な気持ちになって、その食べっぷりを見ていた。

「お前、腹減らないの？」

口をモグモグ動かしながらリュウ兄はあたしにパンを差し出す。

「・・・胸が一杯でそれどころじゃないもん。」

言った矢先にあたしのお腹が変な音を立てた。

慌ててお腹を押さえたけど、その音にリュウ兄は思わず吹き出す。

「無理しなくていいって。食べよ。」

あたしは渋々パンを受け取ってかじった。

「これで終わりだね。」

「そうだな。」

「また来れるかな？」

「どうかな。」

「また・・・愛してくれる？」

「・・・バー力。」

最後の質問を彼は笑ってはぐらかした。

返事の代わりにあたしの頭を抱き寄せ、素早くキスする。

彼が、昨日のことをどう思ってるのか分からないけど、あたしは幸せだった。

あたしの忌まわしい思い出は、彼の優しい愛で見事に払拭され、昨夜のセックスはあたしにとって大切な思い出になった。

海に見えるスイートルームで、一緒にお風呂に入って、お姫様だったでベッドインして、彼の腕枕で目覚める初体験。

女の子冥利に尽きる体験だ。

あれ・・・？

あまりに理想的だった彼の行動にあたしは気付いた。

「もしかして、リュウ兄ちゃん、これも計画の一部だった？」

「さあな。」

彼は恥ずかしそうに横を向く。

あたしはやつと気が付いた。

トラウマになっちゃったあたしの忌まわしい記憶を、リュウ兄は最高の思い出に塗り替えてくれようとしてたんだ。

女の子なら誰でも懂れる初体験のシナリオ。

どこで覚えたのか知らないけど、彼は忠実に企画、実行した。計画的犯行だったんだ。

あたしはまんまと引っ掛けられ、彼の最高の愛によって、もうセックスが怖くなくなった。

「ありがとう。リュウ兄ちゃん。」
「何が？」

白々しく言った彼の横顔が赤くなっている。
あたしはその顔を眺めていた。

あたしだけの美しいアポロン。
あたしだけのモデル。

あたしはこの人に愛された事を生涯誇りに思うに違いない。

やがて時計はタイムリミットの10時を回った。

あたし達はチェックアウトを済ませ、ホテルの外に出た。
心配だった宿泊費用は、リュウ兄ちゃんがカードで精算したので結局分からず仕舞だった。

まだ人気のない朝の浜辺を、あたし達は手を繋いで波止場に方角に歩いた。

あたしもリュウ兄も無言だった。

車に乗って、元来た道を名古屋方面に北上していく。

リュウ兄の言うところのゴタゴタした工場ばかりの街並みが現れて、あたしは溜息をついた。

彼は無表情のまま運転しながら、開け放した窓に腕を乗せてタバコを吸っている。

あたしの下宿まであと30分。
車のナビが到着予定時間を告げている。

「おい、桃子。」

唐突にリュウ兄は前を向いたまま口を開いた。

「俺の経験からいくと、警察からまず親に電話がいくと思う。かあさんはパニックってお前に電話するだろうから、そしたら頼むな。お前と一緒にいてやれよ。」

「・・・うん。」

「大学、ちゃんと行けよ。」

「・・・うん。」

あたしは唇を噛み締め、涙を落とさないようにするので精一杯だった。

やがて見慣れた農道が現れ、古いレトロな学生寮の屋根がゴタゴタした宅地の向こうに現れた。

・目的地周辺です。ルートガイドを終了します・・・

ナビの音声が一方向的にあたし達の旅の終焉を伝える。

あたしは顔を覆った。

「じゃ、俺行くよ。元気だな。」

なかなか車から降りようとしないうあたしの背中に腕を回して、リュウ兄は最後にもう一度キスをした。
軽い、優しいキスだった。

「待つてるよ。リュウ兄・・・。」

車を降りたあたしの前で、助手席のドアが閉められる。

アクセルを乱暴に踏み込む音がして、車は走り出した。
あたしは去っていく黒い車を見つめながら、農道に座り込んで泣き
崩れた。

第24話（後書き）

ここまで読んで頂きましてありがとうございます。
次回から、最終章突入です。
もう少し、お付き合い下さいね。

第25話

桃子を学生寮の前で下ろした後、俺は地元の警察署に向って車を走らせた。

桃子の大学があるのは隣の市だけど、敢えて地元の警察に行くのは、少しでも知り合いがいた方が心強いからだ。

自慢じゃないけど、補導歴のある俺には警察に知り合いが何人かいた。

高校時代に、深夜の繁華街で暴行事件を起こした時、俺を補導した四角い顔の年配警察官の顔が目に浮かぶ。

暴れる俺をぶん殴って、地面に叩き付けたヤツをこんなに懐かしく思い出せる日が来るなんて思ってもみなかった。

まだ定年退職してなきゃいいけど。

俺はまたタバコに火をつける。

・・・やべえ。

完全に中毒だ。

タバコが終わるとイライラするのは、俺がビビってるからかな？

交通量が増えてきた国道を走りながら、俺は昨晚のことを思い出していた。

自分でも、自分の取った行動に自信が持てない。

俺は最悪の思い出になってしまった彼女の初体験を、素敵な思い出に変えてやりたかった。

その相手が俺で良かったのかどうか分からない。

何しろ、俺たちは血が繋がっている。

桃子は泣いてた。

俺は別にテクニシャンではないけど、あれは女性としての悦びの涙だったと信じたい。

近親相姦が罪になるのか俺には分からない。

でも、彼女のトラウマが消えるのなら、俺はもう一つくらい罪を増やしても全然構わない。

どうせ今回だけで、不法侵入、器物損壊、傷害、暴行だ。

今更、近親相姦くらいどうってことない。

桃子の甘いアニメ声が俺に懇願した時、不覚にも我を忘れてしまった。

ヤツが自分の好きな女のタイプだったのは、俺自身が一番驚いた。吸い付いてくるような肉付きのいい白い肌、エロビデオみたいな高いアニメ声、メガネを外した泣き顔は男の本能をくすぐる。

妹に欲情するとは思ってなかった。

俺って変態だったのかな？

彼女は俺が好きだって言った。

あの時、俺は正直嬉しかったんだ。

実を言えば、昨日泊まったホテルは初めて行った訳ではなかった。高校三年の時から付き合いだした綾香と初めて肉体関係を持った場所が、あのホテルだったからだ。

ちょうど、付き合いだして1年目だった。

今の会社に入社して俺の初めてのボーナスが出た時、俺は彼女を旅行に誘った。

もちろん、やりたかったからだ。

不良は不良でも暴力系武闘派の俺は女に対してはオクテで、一年たっても綾香の体には手を出してなかった。

おまけに彼女は初めてだった。

その時、高校2年生だったんだから、まあ普通か。

下心丸出しで旅行に誘った俺に、彼女はワープロで打ち出したA4の紙を突き出した。

箇条書きになった誓約書に俺は目を丸くした。

隆一君に綾香のバーจินを捧げる為の諸条件

- 1 > 海が見えるホテルのスイートルームである事。
- 2 > 海が見える露天風呂に二人で入る事。
- 3 > お姫様だつこでベッドまで連れていく事。
- 4 > 私の名前を呼びながら何度もイカせてくれる事。
- 5 > 終わったら、私を胸に抱いて腕枕をして寝かす事
- 6 > 私より先に寝ない事。
- 7 > 私より先に起きない事。
- 8 > ちゃんと避妊する事。

「分かったら、サインして。」

綾香は真剣な顔で俺に言った。

冗談ではないみたいだ。

俺は半ば呆れて逆に聞き返す。

「お前、本当にバージンかよ？」
俺の言葉に綾香はキイキイ怒った。

「失礼ね！当たり前でしょ。女の子の一番大切なものあげるのよ。
これっくらいの条件、当然よ。」

「だって、バージンにしちゃ具体的過ぎねえ？何度もイカす事って、
お前、どうやったらイクんだよ。初めてなんだろう？」

「男でしょ？そんなこと、自分で考えて。」

「そっちが初めてなのに分かる訳ないじゃん。矛盾してねえ？」

「し、知らないわよ。とにかくそれは男の仕事だって。」

俺は頭を掻いた。

当時、まだ１９歳だった俺は、耳年増の１７歳の綾香に完全に負けていた。

彼女は顔を真っ赤にして紙を俺の胸にドンと突き出した。

「これをやってくれないなら、隆一君にはあげません！するの？しないの？」

「・・・分かったよ。やってみるよ、できる範囲で・・・。」

俺は勢いに気圧されて、作業着のポケットに入っていた業務用シャチハタで、捺印した。

思い出して、俺は苦笑する。

確かに大した女だ。

桃子が言ったとおり、タダ者じゃなかったかもしれない。

経験が無くて、他の方法も思いつかなかった俺は、彼女の条件通りに動いて、何とか女の子の一番大切なものを貰う事ができた。

それ以来、女の子の初体験はあの条件通りすればいいのだと、単純

な俺の頭にインプットされた。
今回、桃子にしたことはインプットされていたプログラムを実行したに過ぎない。

「女の子は進化するんだよ。」

桃子が言ってたのを思い出す。

確かに、綾香は俺を好きだったと思う。
暴行の常習の俺と一年も付き合ってから、大事なものをくれたんだから。

変ったとしても、あの時の気持ちは嘘じゃないはずだ。

俺は急に綾香の声が聞きたくなった。

ムシヨに行く前に一言だけ。

車を国道沿いのコンビニに止めて、俺は携帯を取り出した。

彼女の番号はまだメモリーに入っている。

車の時計は昼を回っている。

出てくれればいいけど。

何度かコール音がした後、彼女が出た。

「・・・隆一君？」

不審そうにオズオズと綾香の声が問いかける。

俺も少し緊張した。

まだ2ヶ月しか経ってないのに、知らない女の人の声みたいだ。

「そう。俺。元気か？」

「うん。どうしたの？」

どうしたのって言われても・・・。

今から刑務所入るから、とは言えず俺はテキトーに返事をする事

にした。

「いや、この前、カンジ悪い別れ方しちゃって、悪かったと思ってごめん。」

ああ、と彼女は明るく言った。

「こつちこそ、唐突に切り出しちゃってごめんね。でも、私、ずっと考えて、決めたの。大きな世界に行こうって。」

「大きな世界って？」

「隆一君も言ったでしょ？この街にいてもしょうがないって。私なんか大学卒業したってこの街でフラフラ、バイトするだけで終わっちゃうわ。私はそんなの嫌なの。あたし、イギリスに留学することにしたから、未練のあるものは断ち切ろうと思って、別れる事に決めたんだ。」

「イギリスに留学？」

俺は驚いた。

派手で軽いカンジの綾香がそんな真剣に将来の事を考えてたのは意外だった。

「そうよ。日本にいても、就職先なんか無いもの。私はイギリスに今から留学して、就職活動もしてくるつもり。就職決まったら、もう戻ってこないわ。大学も辞める。だから、隆一君に待ってもらうの悪いから、別れることにしたの。日本に未練は残したくないからね。」

俺は絶句した。

ハキハキ自信を持って話す彼女の声は、別人みたいだった。

俺が工場で無気力に単純作業やってる間、綾香は自分なりに人生を考え、努力してたんだ。

お前はやっぱり大した女だ。

「隆一君、私が変わったと思ってるでしょ？」

悪戯っぽく言った彼女の言葉に、俺はギクッとする。

「うん・・・まあ。思ってた・・・。」

開き直ったように、彼女は続けた。

「私は変ったよ。私は自分を磨こうといつも努力してるもん。男の好みが変わるのは当たり前でしょ？あたしは、もっと広い所を見たい。もっと色んな人と会いたい。それだけよ。」

「分かってるよ。綾香。」

俺は笑いながら、さっぱりした気分で言った。

こいつを応援したい。

素直にそう思った。

「頑張れよ。応援する。でも、一つだけ聞いてもいい？」

「・・・何？」

俺は少し緊張して、思い切って言った。

「俺が最初の相手で後悔してないか？」

電話の向こうで彼女が笑った。

「してないよ。だって最高の夜だったもん。大好きだったよ、隆一君！」

第26話

電話を切った俺はシートに背中を押しつけ、伸びをした。
これで心のわだかまりが一つ消えた。

綾香も頑張ってるんだ。

女って逞しいな。

何となく俺は置いてかれたような、でもそれを見守る父親のような
温かい気持ちになっていた。

妙にさっぱりした気分になって、俺は車を降りてコンビニに入った。
今更、少しくらい遅くなっても構わないだろう。

人殴ったくらいで全国手配されてる訳でもなさそうだし。

俺は呑気にタバコと冷たい缶コーヒートをレジに持っていた。

そうは言っても。

見覚えのある地元の交差点を過ぎ、警察署が現れると俺はまたタバ
コに手を伸ばした。

駐車場に車を入れた時には、タバコを持つ手が震えるほど緊張して
いた。

捕まったことはあっても、自首したことはなかった。

昨日、ボコったあのカマ野郎の顔が俺の脳裏に浮かぶ。

まさか死んではないだろうけど。

俺は自分のした事を後悔はしていない。

俺の暴力には正当な理由がある。

でも、犯行の動機に桃子の事を言うつもりはなかった。

アイツが今まで誰にも言えず、吐くまで黙ってた秘密だ。

俺はそれを墓場まで持っていくつもりだった。

だったら、俺はこれ以上話がこじれる前に、出頭した方がいい。
桃子に被害が及ぶことだけは、絶対避けなければ……。

タバコが灰になるまで、俺は口にも咥えず、手に持ったまま考え続けた。

俺は悪くない、でも仕方ない。

こうするしかない。

よし！

理論武装はできた。

俺は覚悟を決めて、車から降りると警察署の門に向かって歩き出した。

変なフクロウのキャラクターが警察官のコスプレをしている看板が、
門の前にバーンと立て掛けてある。

この県のシンボルらしい。

野生のこんなの見たことないのに。

交通事故死全国ナンバーワン、返上！と書いた横断幕がかかったエ
ントランスが見える。

俺みたいなドライバーがいる限り、絶対無理だ。

鼻で笑って、俺は警察署の建物の中に入った。

入り口の自動ドアが開き、ドキドキしながら俺は中に入っていく。

いきなり入った右手に案内所みたいなカウンターがあつて、そこに
座っていた女性警官が2人、ジロリと俺を睨む。

ホテルの受付嬢とは全く別モノの女どもだ。

現役女子柔道選手に違いない、この体型。

まあ、別にいいけど。

俺はカウンターに手を載せて、彼女の一人に話し掛けた。

「あの……すいません。」

何か用か？と言わんばかりに、返事もせずに彼女はジロリと俺を睨みつける。

カンジ悪・・・。

これでも公務員かよ？

俺も少しムっとしてそいつを睨み返す。

「あの、自首しに来たんですけど・・・。」

「はあ？自首？」

せつかく小さい声で言ったのに、そいつはデカイ声でオウム返しに返答した。

チクショー・・・。

俺はこういうデリカシーのないオバサンが嫌いなんだよ。

それを聞いたもう一人のオバサンが顔を強張らせて、席を立つと、事務所に姿を消した。

これでいい。

少しは話が分かるヤツが出てくる筈だ。

思ったとおり、事務所のドアが開いて、強面の体格のいい男性警官が3人ほどバタバタと現れた。

三人は俺を囲んで逃がさないように体制を整えてから、作り笑いをした。

犯罪者を落ち着かせようと思ってんのか。

屈強な男が三人で優しい顔をして俺を見つめている。

・・・落ち着く訳ねえだろ。

「あの、自首しに来ました。大学に勝手に侵入して大学生に暴行加えて、多分入院してると思います。大学から被害届け出てると思いますけど。」

一番、貫禄のありそうなデカイ警官が首を傾げる。

受付でまだバカみたいに座ってたオバサンに、被害届けが出ているか確認するように指示を出した。

オバサンは緊張した顔で慌てて事務所に入る。

警官は優しい顔のまま、迷子の子供に話しかけるように言った。

「君、名前は？」

「藤井隆一。23歳です。」

「それはいつの話だ？」

「昨日の午前中。その後、逃亡したんです。すみません。」

俺は素直に頭を下げた。

警官は俺の背中をばんばん叩いて、別室に入るよう促した。

入り口には、俺に関係のない野次馬どもが群がり始めていたからだ。

机と椅子しかない小さな部屋に俺は通された。

よく、ドラマで警官が容疑者に「吐けつつってんだろ！コノヤロー

！」ってやってる部屋だ。

落ち着かなくて、俺の手は無意識にポケットの中のタバコに伸びる。ダメだ。

勝手に吸ってたら印象悪すぎる。

仕方ないから、俺は手を伸ばさないように両腕、両足を組んで椅子に座っていることにした。

突然、ドアが開き、見覚えのある四角い顔のオヤジ警官が入ってきた。

俺より小さいこのオヤジがハンパなく強いのはよく知っている。

高校の時、繁華街で俺を叩きのめしてくれたあの警官だった。

俺は嬉しくて思わず立ち上がった。

「・・・・・・・・・・」

しまった。

名前忘れた・・・。

立ち上がった俺が口を開けたまま沈黙したので、変な間ができた。

「俺を忘れたか？藤井。山田だよ。お前、いい年して何やってんだ？」

「そうだ、山田だ。」

厳しい顔に刻まれた皺を少し緩ませて、山田さんは太い声で言った。

「すみません。昨日の午前、俺は大学に不法侵入して、大学生に喧嘩売って、ケガさせて、テーブルとか椅子とか大学のモノも壊して・・・。その後、逃げました。大学から被害届けは出てる筈です。多分顔面骨折くらいはしてる筈・・・。」

畳み掛けて話す俺に、まあ座れと山田さんは椅子を勧めた。

「お前がしたことはよく分かった。だけど、出てないんだよ。被害届けが。」

「えええ・・・？」

俺は眉間に皺を寄せて、変な声を出した。
そんな筈ない。

あの後、誰かが救急車でも呼んだら、すぐ警察沙汰になる筈だ。

「そんな筈ありませんよ。かなり暴れたし・・・。」

「でも、出てないんだ。被害者あつての加害者だからな。届けが出てなかったらお前を捕まえられんよ。」

「そんな・・・じゃ、確認してきますよ。」

「いいよ、ほつとけ。相手は示談で済ませたいんじゃないのか？立件するのが被害者の希望じゃないこともあるからな。取り合えず、お前の携帯番号、ここに書いとけ。届けが出たら俺が捕まえに行く」

から。」

山田さんは自分のメモ帳とペンを俺に差し出す。

狐に化かされたみたいない気持ちで俺は住所と番号を殴り書きした。

山田さんはそれを見て、遠い目をする。

「お前も大きくなったな。もう結婚してんのか？」

「いや、まだです。」

「働いてるのか？」

「はい。何とか。」

山田さんはいきなり俺の頭に手を伸ばして髪をグシャッと掴んだ。

「頑張れよ。もうこんなところ来るんじゃないぞ。」

「・・・はい。」

不覚にも涙が出てきた。

山田さんは笑って立ち上がると、部屋のドアを開けた。

「もう帰れ、藤井。届けが出たら、俺が呼びに行くから。その時は大人しく捕まれよ。」

第27話

俺はぼんやりしたまま警察の門を出た。

さつき見たコスプレフクロウの看板を背にして、駐車場に向って歩いていく。

何も届けがないだと？

あれだけやったのに？

夢だったんだろうか？

昨日のことなのに、確かにもう昔の話のような気もしていた。ノロノロと車に乗って、俺は固まっている頭を必死で動かそうとした。

その時。

ジーンズのポケットに突っ込んでいた携帯が突然鳴り出した。

俺はビククリして思わず飛び上がる。

慌ててポケットから引っぱり出すと、かけているのは桃子だった。

俺はオタオタしながら着信ボタンを押す。

「リュウ兄ちゃん！どこにいるの？」

俺が返事もしないのに、桃子のキンキン声が響いてきた。

「どこって、警察・・・。」

「すぐ戻ってきて！あたしの学生寮まで！今すぐ！分かった？」

「な、何だよ？どうしたって・・・。」

「早く来て！話はそれから！」

一方的に電話は切られた。

何がどうなってんだよ。

訳が分からないまま、俺はエンジンをかけて車を出した。

さっき来た道を逆戻りして、俺は桃子の下宿に向った。

いつもの農道に車を止めようとしたら、そこには見覚えの無い先客の車が止まっている。

ハイブリッドプリウス、最新のヤツだ。

その部品を作ってる俺たちは乗ったことがない代物だ。

品川ナンバーで、長い事ここに通っている俺が一度も見たことがない車だった。

俺はその車の後ろに、駐車して桃子の下宿に向って農道を歩いていった。

いつものレトロな玄関の前には桃子と小さな太った女の子が抱き合って、俺が来るのを待っていた。

このおデブには見覚えがある。

エミリン、だったっけ？

自分達のほうに向ってくる俺に気が付いた桃子は、何かを叫んで、まっすぐ走ってきた。

俺の胸に飛びつき、背中に両腕を回して抱きしめると、顔を埋めてわあわあ泣き始める。

俺は訳が分からずに呆然とされるがままになっていた。

「リュウ君、もう刑務所行かなくてもいいんだよ。」

エミリンは桃子の背中をポンポン優しく叩きながら俺を見上げた。メガネをかけた丸くて白い顔。

こいつは桃子と同類だってひ一目で分かる。
でも、何でこいつがそんなこと知ってるんだ？

「藤井隆一さんですか？」

突然、階段の奥から低い男性の声が響いた。

ビシッとしたグレーのスーツを着用したダンディな年配の男性と、髪をカールしたクリーム色のワンピースを着た中年女性が、薄暗い階段を連れ添って降りてきた。

俺の前に男性は歩み寄り、いきなり頭を深く下げた。

「私は佐藤裕也の父親です。バカ息子が妹さんにしたこと、他の女子学生にしたこと、全て聞きました。

警察で罪を償うのは本当は息子の方です。

ですが、桃子さんと今お話させて頂き、それが桃子さんの希望ではないと言われました。

あなたが息子にしたことは当然のことです。

大学の方にも損害は弁償することで話しています。

事件が公になることで、逆に桃子さんに迷惑がかかることもあると思います。

どうしようもないバカ息子ですが、私達にとってはたった一人の息子です。

どうか、このまま穏便に終結させては頂けないでしょうか？」

俺はポカンとして真摯な顔で話をする男性と、ハンカチで顔を覆って泣き始めた奥さんを見比べていた。

つまり、こいつらカマ野郎の親が。

俺の頭の中がやっと整理された。

大学が警察に通報するより早く、誰かが息子の悪事を親にチクったんだ。

息子を守る為に、気の毒な親は東京からすっ飛んできて、大学に話をつけたに違いない。

誰がそんな迅速、かつ機転の利いた行動を・・・？

俺の横でエミリンがニンマリ笑って親指をグッと立てる。

俺はその丸くて白い顔を見つめた。

まさか？

こいつが俺を助けてくれたのか・・・？

桃子は俺にすがりついたまま、まだ泣いている。

と、いうことは・・・。

既に示談成立してんのか？

俺はムシヨに行かなくてもいいってこと・・・？。

突然、体の力が抜けて、俺はその場にへたり込んだ。

今回の一番の功労者は意外にもこのエミリンだった。

「俺は藤井隆一、藤井桃子の兄貴だ！」

そう怒鳴ったあの時、エミリンは実は俺の目の前にいたらしい。完全にキレて我を忘れていた俺にはもちろん、その姿は目に入っていなかった。

それを聞いたエミリンは俺の正体から、そこにいた理由まで、全て

を理解した。

俺たちが逃げ出したあの時、エミリンはマンガ研究会の部室に向けて猛ダッシュした。

部員名簿を部室から引っ張り出し、佐藤裕也の東京の実家の番号を見つけると、その場で携帯から電話した。

「あたし、藤井桃子といいます。息子さんにされたことについてお話があります……。」

電話に出た佐藤裕也の母親にエミリンはそう切り出した。

自分がされたことの復讐に兄がヤツを殴ったのは正当なことだ。

今回のことを立件したら、自分も黙っていない。

レイプされた他の女子学生も集めて、息子を警察に婦女暴行容疑で訴えてやる。

そう脅された可哀相な両親は、取るものも取り合えず、東京からすっ飛んできたのだ。

品のいいダンディな父親は大手不動産会社の重役で、ヤツはコネで内定している会社が決まっていたのだ。

この就職難の時代に、内定取り消されたら、もっと大変なことになる。

立件する筈がない。

被害者だろうが、加害者だろうが、刑事事件になって一番困るのはヤツだった。

大学内で壊したモノについてはこのご両親が全部弁償してくれた。

桃子はもちろん、ヤツを訴えるつもりはなかったし、俺が刑務所に入ることも望んでいなかった。

だから、この件はお互いなかったことで、話はついた。

菓子折りと示談金を持ってきた両親に桃子は丁寧に対応し、俺を訴えなかった事に感謝した。

示談金だけは、貰う事ができないと辞退したらしい。

貰えるモンは貰っとけばいいのに。

俺はそう言ったが、彼女は首を振った。

貰ったら、自分がされたことが本当に強姦だったと認めることになるから、と言った。

だって強姦じゃねえか、って俺は思ったけど、女のプライドってヤツだろう。

だから俺はそれ以上は言わなかった。

佐藤裕也については、やつぱり全治2ヶ月の重体だった。

鼻の骨折に、前歯が2本折れていた。

蹴りを入れた胸部は肋骨が折れ、股間については生殖機能は失われなかったものの、肛門を縫うハメになったらしい。

それについては、ざまあみろと思っただけだ。

今後、ヤツが新入生を餌食にすることはないだろう。

バカ息子に似合わない常識ある親御さんたちの対応に俺たちは助けられた。

いや、このエミリンに助けられたというべきか。

礼をしたいと言った俺にエミリンはニンマリ笑って言った。

「じゃあ、スタバでキャラメルマキアート奢って下さい。」

また、あのショッピングモールか・・・。

何で女はスタバが好きなんだろう・・・？

俺は笑って親指を立てた。

第28話

あれから半年が過ぎた。

暑かった夏は何とか過ぎて、やっと秋の涼しさが風に感じられる。
俺の一番好きな季節だ。

俺は相変わらず、組み立てラインで機械工をやっている。

今年になって少し景気が上向いてきたために、会社は新入社員を増員してきた。

単純作業だった俺の仕事は、班長という小さな役を与えられ、雑用が増えた。

つまねえ仕事だと思ってたけど、それを回していくのは大変な仕事だ。

何しろ、人を教えるのが俺は面倒くさくて仕方ない。

今日も、突然休んだヤツの穴埋めに、俺は溶接の工程に入っている。
暑い……。

くそお……めんどくせえ……。

俺はブツブツ言いながら、火花を飛ばして働いていた。

「藤井班長！」

後ろから声がして、俺は振り返る。

今年、大学卒業して入社した滝川ってヤツだ。

俺はコイツが苦手だ。

小柄で真っ白なきれいな肌。

女の子みたいな顔立ち。

さらさらの髪。

長い睫毛の大きな二重の目。

俺が大ツキライな、やられるほうのタイプだ。

桃子が大好きなタイプだろう。

そいつはにこにこしながら、悪びれもせず俺に言った。

「藤井班長、部品が足りません。」

「何だと？」

笑い事じゃねえだろ。

俺は慌てて立ち上がる。

「運搬のパートのオバサンは？」

「さつき子供が熱が出たって学校から電話があって帰りました。」

「はあ？聞いてねえよ！」

「だから今、ぼくが連絡にきました。」

「遅っせえよ！てめえら、ライン止める気か？」

俺はゴーグルを掴んで床に叩きつける。

要領が悪すぎる。

何なんだ、こいつは？

「お前、ここ入ってる。俺が運搬やるから。足りないのは何だ？」

滝川は、あつと手で口を押さえる。

「今、見えます。」

「ばかやろう！最初から紙に書いて持って来い！」

「はい、今から書いてきます。」

慌てて走り出すヤツの襟首を俺は掴んだ。

「もういい！俺が調べて持ってくるから！……ったく、元大学生
だろ？バカ過ぎるぞ。」

滝川は顔を赤らめて、頭を掻くとテヘへと笑った。

「そういう藤井班長は元ヤンですか？」

「うるせえ！悪いか！てか、そんなことより台車持って来い！」

「溶接やるのと、台車持つてくるのとどっちが先ですか？」

「台車だ！早く行け！」
俺はブチ切れて、そいつのケツを蹴り飛ばした。

雑用が増えて、責任は重くなり、バカばかりの新入社員どもの世話。

この半年、俺はメチャクチャ忙しくて、でも楽しい日々を送っていた。

あれから・・・。

桃子とは会っていないかった。

桃子からも連絡がなかった。

禁断の一線を越えてしまった俺は、彼女と会うのが何となく気恥ずかしくて、疎遠になっていたのだ。

何の感情もなかった時は裸にだってなれたのに。

あいつを抱いてから、俺はまた脱げるかって聞かれたら多分無理だ。もうモデルはできない。

俺はもう自制が効かないのが分かっていた。

ズルズルとこの関係が続けるのは、俺は避けたかった。

今でも時々思い出す。

アイツの白い肌。

濡れた泣き顔。

柔らかい大きな胸。

子猫みたいな喘ぎ声。

俺は髪をぐしゃぐしゃ掻き混ぜて、妄想を吹き飛ばした。

もうだめだ。

あいつを抱く事はもう許されない。

台車を押しながら俺は溜息をついて、倉庫に向う。

その時、群青色の作業着の胸ポケットからメールの着信音が聞こえた。

友達もいない俺にメールなんて滅多に來ない。

俺は思わず、携帯を掴んで確認する。

やっぱり、桃子からだ。

久しぶりに会う元カノみたいな、変な期待で俺の胸は一杯になった。

リュウ兄ちゃん。

久しぶり。

桃子です。

今夜、下宿に來れますか？

大事なお知らせがあるんだよ。

待ってます。

メールにはそれだけ書いてあった。

行くしかねえだろ。

俺は少し鼓動が速くなったのを感じながら、台車をガラガラ引つ張って行った。

第29話

いつも通り2時間の残業を済ませた後、俺は桃子のいる学生寮に向った。

久しぶりのいつもの農道に車を止める。

最後に会った時は桜の季節だったのに、秋らしくなった今は夜風が冷たくなって、コオロギの鳴き声でやかましい。

秋生まれの俺が一番好きな季節だ。

俺はいつも通り、レトロな玄関を通って桃子の部屋に続く階段を登っていく。

登ったところで、ヤツの部屋のドアがバン！と開いた。

「いらっしや〜い！リュウウちゃん。」

相変わらずの丸い顔でニンマリ笑って、彼女が飛び出してくる。ダサイジャージを来たコイツは、あの夜の前のハムスターに戻っていた。

ホットしたような、少しガツカリしたような・・・。

複雑な気分で俺は苦笑いして、手を振った。

「ああ、久しぶり・・・。」

部屋に入ると、そこは以前のままの汚さで、俺は座る場所を探して部屋の中をウロウロした。

桃子は散らばっていた雑誌をブルドーザーみたいに両手でダーっと押しのけ、隙間を作るとそこに座布団をひいて俺に勧める。

ここに来たのは久しぶりだったけど、以前と変わりが無くて俺は安心した。

桃子は立ち直って、元気にやってる。
聞かなくても俺には分かった。

桃子はニヤニヤしながら、茶色の大きい紙封筒を俺の前に持ってきた。

「大ニユースがありまーす！」

そう言くと、一人で手を叩いて喜んでいる。

俺はタバコに火をつけながら、それを無表情で見ていた。

「・・・何だよ？早く言えよ。」

「あたしの芸術作品が大賞を取りました！賞金100万円です！」
えへへ〜と変な笑い声を出しながら、桃子はガッツポーズをする。

「・・・マジ？」

俺は言葉を失った。

こいつの作品が認められた。

努力が実ったのか。

つけたばかりのタバコを消して俺は立ち上がった。

「やったじゃん！桃子。おめでとう！」

「ありがとう！リュウ兄のお陰だよ！」

俺達は抱き合って汚い部屋の中をクルクル回った。

「リュウ兄ちゃんがモデルになってくれたお陰で、あたしの作品に足りなかったものが分かったんだよ。生きてる感じがあたしの作品に出てきたの。」

「そっか。それは良かった。」

「ストーリーもリアリティが出てきて、心に響くって評価高かったの。」

「そっか。」

「コマ割も上手くなってるって。テンポが良くなったって褒められた！」

コマ割？

聞いてて俺は違和感を感じ始めていた。

考えたら、こいつの作品を俺は見たことがない。

一体、何を作ってたんだ？

「お前、何を作ったの？」

基本的情報が無かった事に俺はようやく気付いて、初めてその質問をした。

桃子は目を見開いて、驚いた顔をする。

「あれ？あたし、言わなかったっけ？あたし、BLマンガ描いて投稿してるんだよ。」

・・・今、なんて言った？

俺は啞然として、その場に立ち尽くす。

「BLってお前の好きな・・・？」

「そう。ボーイズラブ。やだ、今まで知らないでモデルしてたの？」

桃子はさっき持ってきた茶封筒をガサガサ開いて、俺に見せた。

そこには一冊の少女漫画雑誌。

目がキラキラした美しい男が二人、バラの蔓に巻かれて裸で絡み合う表紙の雑誌が入っていた。

見出しには・・・。

期待の大型新人、モモタンの衝撃デビュー作！
大賞作品掲載

背徳のアポロン - 禁断の恋の行方 -

何だこれは？

俺は青くなつて、それを桃子から取り上げた。

パラパラページを捲つて、期待の新人モモタンの大賞作品に目を走らせる。

そこには生きてるような俺が描かれていた。

もちろん、目がキラキラして、かなり少女マンガ化されている。

確かに上手い。

で、何だか分かんないけど、その俺が他の男に言い寄られて、拉致監禁され、無理矢理やられた後、実はそれが血の繋がった双子の兄さんで・・・みたいなハチャメチャなストーリー！。

俺は読んでて絶句した。

「おい、桃子・・・。」

「ね、いいでしょ？今回の渾身の作品だったの。」

「お前の言つてた芸術つてのは、エロホモ少女マンガのことかよ！」
俺は雑誌を掴んで桃子のケツを思いっきり叩いた。

「きゃあ！痛ったーい！何すんのよお！」

「うるせえ！完全にこれ、俺じゃねえか！てめえ、何描いてくれてんだ！」

「何で？知っててモデルしてくれてると思ってたのに〜！」

「知らねえよ！知ってたらやるもんか！これが俺だって誰かに・・・」

「あ、インタビュー受けたよ。」

俺は硬直した。

雑誌をパラパラめくつてみると、新人マンガ家モモタンの突撃インタビューのコーナーがある。

・このお話の主人公、いいですね。男性の切ない表情がよく表現されてます。モデルはいるんですか？

・モデルは私の実の兄です。今回の受賞を一番に知らせて、この作品を捧げたいと思います。

俺は再び、雑誌を振り上げる。

「俺はホモじゃない！いらねえよ、こんなのに！」

「え〜！ひつどーい！あたし、真剣なんだよお！」

雑誌を頭の上に振り上げたその時、ノーガードになった俺の胸に桃子は抱きついてきた。

背の低い彼女のほっぺがちょうど俺の心臓に当たる。

ヤバイ。

動悸が激しくなる。

桃子は俺を見上げた。

その顔がすごく女っぽくて、俺は動揺する。

あの夜の彼女の泣き顔を思い出して、俺の下半身が熱くなった。

「リュウ兄ちゃん、あたし、真剣なの。」

だってやっぱりBL好きなんだもん。

あたしは、あたしの好きな道を行くんだ。

だから、応援して？」

最後の台詞を言った後、桃子はいつものハムスター顔でニンマリ笑った。

それを見て、俺も思わず苦笑する。

そうだ、こいつはいつもこういう女だったっけ。

マイペースで、自分が好きなことに没頭するのが一番の幸せなヤツ。俺はそういうコイツが好きで、ここに通ってたんだ。

「応援するしかねえだろ……。兄貴だからな。」

渋々言った俺に桃子は飛びつき、その重みで俺は背中からひっくり返った。

第29話（後書き）

ここまでお付き合い下さり、ありがとうございます。
次回、最終回です。

第30話 エピローグ

温かくなった春の日差しの中、あたしはリュウ兄の車に乗って、J
Rの駅に向っていた。

卒業したあたしは、下宿を引き払い、4月から東京に行く事になっ
たのだ。

大学在学中にBLマンガ家としてデビューしたあたしは、連載を少
しづつ続けていた。

できれば、それ一本でやって行きたかったけど、将来的にはまだま
だ不安定だった。

4年生になってから少し就職活動をしてみて、あたしは東京の小さ
なアニメ製作会社に興味を持った。

若い社員が多くて、個性を尊重してくれる社風がウリ、とあったか
らだ。

あたしはリクルートスーツにお腹のお肉を押し込み、ノコノコ東京
まで面接試験に出かけた。

就学旅行でしか来た事の無い東京は、人多すぎて、歩くのにも慣
れてないあたしは交差点で何度も人にぶつかった。

あの太平洋に比べると、何てゴタゴタしてるんだろう。

リュウ兄ちゃんは絶対ここには住めないな。

交通事故死ナンバーワン県民の代表のような彼がここで運転するこ
とを想像して、あたしは背筋が寒くなった。

怪しげなテナントビルの中にその会社はあった。

面接官は社長、専務、部長、制作チーフと豪華な顔ぶれだ。小さな会社だから、社員は家族で、面接は主要メンバー全員であるのが方針だと、ヒゲを生やした芸術家みたいな社長さんが優しく言った。

あたしは大賞を取った背徳のアポロンが掲載された雑誌と、リュウ兄のスケッチを社長さんに見せた。

「あたしはこの会社で生きてる絵を描きたいんです。」

志望動機を聞かれてあたしは迷い無く答えた。

リュウ兄のスケッチと雑誌を見た後、社長さんはハウと声を出した。

「これ、誰がモデルなの？」

「兄です。」

眉毛を上げて、社長さんはスケッチをもう一度見直す。

「お兄さん、セクシーだね。」

「はい、綺麗な人です。あ、その・・・体が・・・。」

緊張して、たどたどしく答えるあたしを見て、皆微笑んだ。

雑誌と、スッチブックをあたしに返すと、社長さんは優しく笑みをを見せて言った。

「君の絵は確かに生きてるよ。4月から東京に来れるかい？」

大学生活はあっという間に過ぎて、あたしは無事に卒業した。

親友のエミリンは静岡の実家に帰って、小学校に美術教員で入ることに決まった。

BLは趣味の範囲に収めることにしたらしい。

4年間過ごした懐かしい学生寮の荷物を片付け、2トントラックに載せて東京の新居まで運んでくれたのは、リュウ兄と会社の部下達だった。

完全に番長と化したリュウ兄の命令に従う部下の中に、メチャクチャあたし好みのコがいたんだけど、こいつはバカだからと言って、紹介もしてくれなかった。

リュウ兄も自分の仕事の中で、役割と居場所を持つてるんだ。孤独なイメージがあったリュウ兄ちゃんのがあたしは少し心配だったけど、仲間達に怒鳴りながらも笑顔を見せる彼を見て、安心した。

あたし達は駅の前駐車場に車を止めて、JRの駅構内に入った。駅の独特の生暖かい風が肌に触れる。

この駅にはひかりものぞみも止まらないので、東京方面への新幹線は一時間に一本しか来ない。

あたし達はプラットホームのベンチに並んで腰掛けて、キオスクで買った缶コーヒーを飲んだ。

リュウ兄は相変わらず無口だった。

タバコに火をつけると、膝に頬杖をついてぼんやり、電車が通って行くのを見つめている。

あたしは最後に聞きたかったことを口にしようか迷っていた。

あの夜、あたしを抱いてくれたことを、今でも忘れる事ができないでいた。

あれはあたしを立ち直らせようとして、やってくれたんだと思う。
普通の男女の恋愛じゃなかったはずだ。
少なくともリュウ兄には。

でも、あの日から彼はあたしの中で一番大事な男性になってしまった。

血の繋がりという壁がなければ、あたしはきっと積極的にお願いを繰り返しただろう。

あたしは、彼が後悔してるんじゃないかと思って、ずっと口にできずにいたんだ。

今しかない。

新幹線が来るまで後、10分。

あたしは、深呼吸した。

「リュウ兄ちゃん、聞いてもいい？」

「・・・何？」

彼は前を向いたまま、目だけ動かしてあたしを見た。
切れ長の鋭い目。

あたしの大好きな目だ。

「あの・・・、あたしとしたこと、よかったの？もしかして後悔してる？」

「うわ！」

言っちゃった！

あたしは返事を聞くのが怖くて目をギュツと瞑った。
しばらく沈黙の後、リュウ兄の低い声がした。

「してるって言ったら、どうする？」

「・・・シヨックだよ。」

あたしの返事に彼は笑った。

「実は後悔してるよ。俺、あれから、お前のこと忘れられないんだから。」

あたしは目を開けて、顔を上げた。

今、何て言った？

それってもしかして、リュウ兄もあたしの事・・・？

「リュウ兄、あ、あたしね、あたしもね・・・。」

言いかけたあたしを、彼は優しい目で見た。

あたしはすごく女の顔をしてたと思う。

あの夜、お願いをした時と同じように。

・東京行き、15時発こだま000 間もなく到着します、白線の後ろまで・・・

突然、アナウンスが響いた。

プラットホームにゆっくりと新幹線が滑り込んでくる。

リュウ兄はタバコを消して立ち上がった。

あたしの頭をくしゃくしゃなでて、切れ長の目を細めて笑う。

「やめとけよ。お前には、まだまだ未来があるんだから！」

新幹線のドアはあたしを乗せた後、ゆっくり閉まった。
リュウ兄はドアの向こうであたしを見つめている。

その完璧な肉体に群青色の作業着を誇らしく纏い、彼はお姫様を見送る勇者のように敬礼してみせた。

あたしだけの美しいモデル。

彼の体はあたしにしか描けない。

もう二度と見ることはないだろうけど。

新幹線はどんどんスピードを上げていく。

小さくなっていく彼をあたしはいつまでも見つめていた。

F i n .

第30話 エピローグ（後書き）

今まで読んで下さった方々、ありがとうございました。
長い間、お疲れ様でした。

また、どこかでお会いしましょう。（^^）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4511t/>

Model

2011年6月19日22時46分発行